

ある。

昭和二十年五月十三日付『西日本新聞』に「学童も手榴弾で敵陣に突込む 壮烈慶良間島の奮戦」という見出しが載っているが、おそらくこれが「伝説」のタネになつたのである。この記事は沖縄前線の報道班員が軍人からの伝聞をもとに書いたものだが、国民の戦意昂揚をあおることを使命とする時の新聞の記事であるから、これは信ずるに足りない。これをもとに書かれた従来の戦争記録のこの部分は当然改められるべきであろう。

ついでに言えば、本編に証言を寄せている座間味部落の宮城初枝さんの場合も、戦記の誤記によって、女子青年団員五名の一人として自決したことになっている。上地一史『沖縄戦死』に「斬込みの弾薬運搬のため先発した女子青年団員五名は：死んで祖国を守ろうと、けなげにも手榴弾で自決をとげた」とあるが、山川泰邦『秘録・沖縄戦史』にも同様の記述がみられる。五名は自決を決意して手榴弾を発火させようとしたが、弾が不発で全員生き残つたというのが真相である。

さらにあと一件。沖縄のタイムス社『鉄の暴風』に、「（座間味島の）隊長梅沢少佐のごときは、のちに朝鮮人慰安婦らしきもの二人と不明死を遂げたことが判明した」とあるが、梅沢少佐は現在でも健在であり、座間味の人びとと文通も交わしている。

このように、慶良間諸島の戦争記録のなかには、渡嘉敷島の集団自決の記述なども含めて、誤記と欠落が少なくない。本編の証言がそれらを訂正する資料ともなれば幸いである。

（大城 将保）

青年義勇隊

座間味村字阿嘉 中村仁勇（十五歳）

野田隊

私の手もとに野田隊の戦死者名簿がのこっています。野田少佐の署名と印がついたもので、これは部隊が山を降りるときに私の伯父にあづけたものだそうです。そのほかにも、私は勤務中隊の中村といふ将校から陣中日誌を見せてもらつたりして、あのときの部隊の動きとか戦闘の模様は、自分の体験だけでなく、だいたいわかるわけです。

阿嘉と慶留間には水上特攻隊の第二戦隊が配置されていたのですが、古賀さんのひきいる基地大隊が、たしか二月十七日（昭和二十年）だったと思いますが、沖縄本島に転進して、その一部の勤務隊と整備中隊がこの島に残ったわけです。それに艇の乗組員一〇四名ですね。以上が正規の部隊で、後で、朝鮮人軍夫の水勤隊（特設水上勤務隊）が約三〇〇名ぐらいやってきています。

いろいろな記録には水勤隊は三五〇名となっていますが、私の記憶ではこの島にはそんなに来てないんじゃないかと思います。この水勤隊には各班に下士官がついていて、布沢少尉とか永田少尉とか、二一名ぐらいだと思います。

このほかに地元で防衛隊と義勇隊が編成されています。防衛隊は、阿嘉・慶留間から四四、五名、また屋嘉比島からも四四、五名つれてこられています。屋嘉比島にはラサ鉱業の銅山があつて、雇も

夜も電燈がついてにぎやかなところでした。家族もふくめて二、〇〇名ぐらいいたんじゃないかと思います。国民学校までありますから。そこからも防衛隊がとられたわけです。全部で阿嘉の防衛隊は九〇名ぐらいです。

これを全部あわせると、この島に七〇〇名ぐらいの部隊がいたことになります。しかし、もともとの地上戦闘部隊ではないわけですから武器というのはないしものは持つていません。挺進隊は特攻艇一〇〇隻のほかは爆雷と拳銃ぐらいしかもっていないわけですから。これが、実際の戦闘がはじまるとき、艇は最初の爆撃でほとんどやられてしまって、部隊は山にはいるわけです。このとき、各隊は戦隊長の野田少佐の指揮により、それで野田隊と呼ぶわけです。勤務隊と整備中隊が機関銃とかて、弾筒とか無線機をもつていて、これが主力ということですが、整備中隊の隊長は鈴木大尉で、この人は斬込みの先頭に立つて戦死しています。

部隊は、最初は部落のはずれにカヤ葺きの大きな兵舎を建てて駐屯していたわけですが、戦闘がはじまって山にはいると兵隊も住民もみんないまじって、バラバラの状態になつたんです。

私も、いつの間にか義勇隊ということで部隊と一緒に行動しました。山にはいつからでも、防衛隊にとられた人が何名かいます。

国民学校の教頭先生なんか、学校はもうないわけですから、防衛隊にとられて通信小隊にいれられています。

義勇隊

私は、県立一中の二年生で、十・十空襲は那覇で経験したなんです

が、十九年の十二月に、十日ばかり冬休みがあるので、そのとき島に帰ってきたわけです。阿嘉にはセイコウ丸という連絡船があったのですが、これは十・十空襲で那覇で沈められてしまつて、二〇〇トンぐらいの木造船の、軍用船が一隻通つてゐるだけでした。この船で帰省したわけですが、これはもともと民間人は乗せない船ですから、それでもう那覇には帰れなくなつてしまつたわけです。私と一緒に中学生が五、六名島に帰つてきていました。いま名護病院長をしている金城幸善君も二中の一年生でこのとき一緒に帰りました。

そこで、昭和二十年を迎えて、われわれ中学生も青年団にはいつて、そこで訓練を受けたわけです。青年団といつても、昭和五年生の私らが最年少で、上に四年生と三年生がいて、全部で三〇名ぐらいいだつたと思います。昭和五年生が七名、四年生が十名、これに沖縄から帰つてきた四、五名、これが後に義勇隊とよばれるようになります。いちばん上の昭和三年生は後で防衛隊にとられていました。

青年団の訓練がはじまつたのは二月末ごろだったと思います。柴田少尉とか布沢中尉とか、若い将校連中が各班の指揮をとつて、匍匐前进とか、散開とか、突撃の訓練などをやりました。九九式の小銃をもたされて、部落の前の砂浜でやつたんです。やついたことは学校の教練なんかと同じことで、特殊な斬込み訓練というわけではありません。弾も少なかつたせいか、実弾演習まではやらせませんでした。

義勇隊という名称も、誰がつけたのか知りませんが、三月二十五日の晩に赤土の壕に全員集結したときに、青年団も一緒に行つて、

二十六日の斬込みの晩に、篠崎伍長が慶留間に泳いで伝令行つています。この人は私たちが赤土の壕に集結しているのを見ていたわけですから、後で斬込みが始つたときに、みんな斬込んで玉砕しただらうと伝えたと思います。また、二十五日夜、隊長の訓示があつた後、柴田通信小隊長が赤土の壕から無線機で最後の打電をして、例の「阿嘉島守備隊最後の一兵にいたるまで勇戦奮闘して悠久の大義に生く」と伝えて、それから無電機をこわしたものですから、この電報が大きく伝えられたのかもしれません。とにかく、斬込みには義勇隊も参加していませんし、もちろん国民学校の生徒もはいつていませんでした。

米軍上陸

三月二十三日から空襲がはじまつていています。二十四日も激しい空襲が続いて、二十五日から艦砲が加わつてきました。

私は家族と一緒にいたんですが、部落の後の赤土の壕に、家族も親戚も一緒に避難したんです。赤土の壕というのは、その辺の土が赤いので軍がそういう名前をつけたわけですが、部落の人たちはもともとマカーガーラ（川）と呼んでいたところです。そこに壕が掘つてあつたので、住民も兵隊もみんなそこへ避難してきましたが、いよいよ艦砲がはじまつて、次は上陸だということがわかつたので、住民は野田山の後のシギヤマ（杉山）に避難するようになります。部隊は野田山にのぼつて陣地構築をやるようにと命令がでたんです。そのときに、私たちは義勇隊として部隊と一緒に行動することになり、また、青年団のなかの昭和三年生は防衛隊に編入されたわ

照明弾がポンポンあがる下で、野田隊長の訓示があつたわけですが、「いいよいよ明日は上陸だ」と言つて、翌朝にそなえて野田山に退つて、そこに陣地構築をはじめるようにという命令です。防衛隊も義勇隊も野田隊長の指揮にはいつて戦うことになつていました。私は友達と三名で赤土壕にかけつけたんですが、私たちは銃はくれませんでした。手榴弾二個とカツオ節一本と乾メン包二袋ずつ渡され、合言葉を教えられました。「一人」と呼ぶと「十殺」ところえるわけです。この合言葉は部落民にも徹底して教えられました。

このときから、彼らの青年団は義勇隊と呼ばれるようになつたわけですが、実際やることと言えば、弾薬運びとか、壕掘りとか、水汲みとか、それぐらいのものでした。義勇隊のなかから戦死者が一名でいますが、これも直接斬込みとか戦闘に参加して死んだわけではありません。防衛隊の人たちは、斬込みのときに道案内などやっていますが、義勇隊はこれにも参加していません。

二十六日夜の斬込みに国民学校の少年義勇隊も加わつて全員戦死したという話が伝わつて、いろいろな本にも書かれているようですが、そんなことはありませんでした。最年少の私たちが国民学校高等科生に間違えられたんではないかと思いますが、でも、私なんか、服装は普通の学生服でしたし、帽子は一中の一本線のはいった学生帽をかぶつて参加しているのですから、どうして間違えられたかわかりません。

ただあのころは、女でも子どもでも、竹槍をもつて戦うんだと言つていましたし、敵につかまるよりは玉砕をするんだと言つていましたから、そういう雰囲気から想像したのではないかと思います。

けです。

野田山というのは部隊が便宜的につけた名称ですが、南にとなり合つた慶留間島に向つていて、高さが一六五メートルばかり、古い松などが生えている山です。そこからは阿嘉部落と慶留間の間の海峡がまつすぐに見おろせるところです。

二十五日の夜、照明弾がどんどんあがつて、山の頂上から中腹にかけての斜面に陣地を掘りました。陣地とはいつても、木の根っこいりこんだ地面を小さなショベルで掘るだけですから、夜明けまでに、小さなタコツボを掘るのがせいいっぱいでした。このほかに陣地らしいものはなかつたんです。

二十六日の上陸の日は、朝から艦砲がはじまつたんですが、島の南西側につきだしてある佐久原と慶留間の間の海峡に砲弾がどんどん落ちてきて、真白い水柱が慶留間の山の高さまであがつて、私は、何だらうあれば、とびっくりしたんです。機雷をつぶすつもりだつたんでしょうね。そのうち、艦砲はだんだん角度をあげてきて、海岸から部落へ落ちだしたんです。部落の家はちょうど一軒おきとばされていました。それが私たのところに近づいてきて、すぐ近くに至近弾が破裂して、大きな松の木が吹きとばされて、タコツボの上からどさっと土がかぶさつてきました。私は、軽機関銃の石田分隊についていたんですが、弾が近くに落ちはじめたもんだから、石田分隊長は「義勇隊は後方に退れ」と命令をだしして、私は、山の裏側にまわつて、そこに小さな壕が掘つてあつたので、そこに

とびこんだわけです。

艦砲は山の頂上までたたきつくると、そこでピタリと止んでしまいました。いよいよ上陸だなと思いました。鈴木中隊長が軍刀を振りながら「全員配置につけ！」と号令をかけて歩きまわっていました。私は機関銃の壕にもどっていきました。

正面の海を見おろすと、艦砲が終ったとたんに上陸用舟艇がいつせいに岸に向ってくるのがみえました。見たこともない舟艇で、ものすごい数の戦車や舟艇が、真白い線をひいてこちらに向ってくるのです。水陸両用戦車というのをはじめて見ました。

部落の前の泊浜に舟艇がのしあがると、舟艇の前部がパクッと開いて、何だろうと思っているうちに、中から兵隊がとびだしてきました。午前八時ごろだったと思いますが、これが沖縄へ米軍が上陸した第一歩だったわけです。

彼らは、浜に上陸すると、すぐにこちらめがけて迫撃砲を撃ちだしてきました。迫撃砲の音がすごい音がするし、真上からどんどん落ちてくるもんですから、すぐ近くでパンパン破裂して、その日一日耳がツンボになるぐらいまでひつきりなしにやられました。

こちらは、でき弾筒と機関銃で一斉射撃に出ました。私は九九式軽機関銃についていて、九九式小銃の弾倉から機関銃の弾倉に弾を詰めかえる作業でした。この弾の詰めかえがなかなかめんどくさくて、手間どつてしましました。

こちらの陣地から上陸地点まではおよそ一キロはあつたと思います。機関銃は弾が見えないからどこへあたつたかわからないんです。機関銃は弾が見えないからどこへあたつたかわからないんです。機関銃は弾が見えないからどこへあたつたかわからないんです。

にも、四方に骨を積み重ねて銃座をこしらえてありました。そこへその夜のうちに友軍は斬込みをやることになりました。斬込み隊は三隊に分かれ、そのなかには防衛隊の一部も含まれています。出發まえに、飯盒のふたで盃をあげて、それから鈴木隊長を先頭に山をおりていきました。

斬込隊は部落の西側からはいっていったそうです。途中、道に迷つて、三隊が一つに合流してしまい、そこで何やら声をかけているときには、その声をキャッチされたのではないかと言われています。また、山道のいたるところに電線が張りめぐらせてありましたからそれにひつかかって察知されたとも言われています。いずれにしても、米軍は斬込み隊が接近しているのを知っていて、彼らが部落の中へはいろいろとするときに、いきなり機関銃の集中射撃を浴びせかけたわけです。斬込隊はすぐ部落の中へとびこんでいって白兵戦になつたわけですが、ほとんどは銃弾でばたばたと倒れていました。鈴木隊長も銃弾で頭を射ぬかれて戦死したそうです。

鈴木隊長の部下の小森中尉が陣地に帰ってきました。隊長の左手を手袋のところから切断して、それをかかえてきました。それと、隊長の軍刀と戦闘帽を遺品として持ちかえっていました。軍刀はひどく刃こぼれがして、血がついていました。小森中尉の話では、隊長はその刀で四五名斬り倒して、そのときに頭に銃弾を受けたそうです。もうだめだから殺してくれと言うので、小森中尉がピストルで撃ったそうです。どういうわけか、遺品の戦闘帽を私があずからことになつたんですが、帽子の左側に弾の穴があいていました。

こうして、斬込みは失敗して、野田隊は山の裏側に新たに掘った

が、でき弾筒の弾があちこちで破裂するのが見えるんです。それで敵はどんどんあがってきて、とうとう、野田山の中腹にコブみたにありあがっているグスク山のところまで登っていました。このとき、友軍は総攻撃に出て、手榴弾なんかも投げて、ものすごい撃ち合いになりました。とうとう私たちは、「後へ退れ」ということにあって、山の裏側にまわったわけですが、この総攻撃で、一応敵は撃退したそうです。

特攻隊の艇は、最初の砲爆撃ではとんとたきつぶされてしまつて、残っているのは、慶留間の北海岸にいる第一中隊だけでした。ここは敵の攻撃は反対側の南側からやってきていますから、島がけになつていて無事だったわけです。そこで、二十六日の斬込みの晩に、篠崎伍長が慶留間に泳いでいて、出撃命令を伝えて、二十七日の未明に四艇が出撃したそうです。これによつて、米軍の駆逐艦とか輸送船にいくらかの損害を与えたようですが、そのことはそのときすでに米軍の捕虜になつていていた柴谷中尉から聞かされたわけです。柴谷中尉がアメリカの舟艇からスピーカーで投降勧告をやると、その話のなかで、全慶良間から出撃したのはわずか四艇であると、損害もこれの程度であると、山の中の日本軍に向つてわざと知らせてきたわけです。抵抗が無駄であることを言つたかったわけでしょうね。

ところで、山の上の友軍陣地の足もとまで這いのぼつてきた米軍も、総攻撃にあつていつたん放の部落まで後退し、部落内に陣地を構えていました。与那嶼さんの屋敷のコンクリート壇の中に野営した。慶留間と阿嘉の海は水上機の基地になつていて、もちろん友軍はこれを攻撃する力もありませんでした。こうして、阿嘉島は八月二十三日までずっとほつたらかしにされていました。

日本兵

兵隊には変り者がいろいろいました。戦隊は別として、基地隊とか整備隊の兵隊は召集兵がほとんどですから、あまり戦闘意欲はなかったんだろうと思います。

私の知つている少尉で、染谷さんという人がいて、私の母が婦人会に関係していましたから、ちよいちょい家にやつてきましたが、「阿嘉の人は、いつたい日本は勝つと思つてゐるのかなあ」と言つたりしたものです。当時の私たちには、日本が敗けるなどとは考えてもみなかつたのですから、日本の将校ともあろうものが、よくもそんなことが言えるものだとびっくりしたのを覚えています。この少尉はふだんの態度からして軍人らしくなくて、部落の中を下駄をはいて歩いたり、隊長室で膝ますきさせられているのを見たこともあります。

二十五日の晩も、染谷さんは私の家にやつてきて、タンスの中から衣類をだしたり、荷づくりをしたりして、避難の手伝いをしてくれたんですが、この人は艦砲はじめても酒をのんでいて、集結

命令がきても、「あ、俺はもう行かん」といつて動かないんですね。その翌日、米軍が上陸してくると、彼は朝鮮人軍夫二〇名ぐらいをひきつれて、白い旗をかかげてまっさきに投降していったんです。

この少尉が後で米軍の舟艇に乗って、スピーカーで投降を呼びかけてくるわけです。舟艇のスピーカーから「糸林軍医ど。ぼくもおかげで君が達者になりました。今度やつてみませんか」と話しかけてくるんです。さきに話した、特攻艇が四隻出撃したという情報も、こうしてこの捕虜になつた少尉が知らせてきたわけです。

鈴木隊の中隊長をしていた小森中尉も白昼堂々と米軍の捕虜になつていった人です。私が漁撈班にはいたころで、阿護の浜で魚をとっていたところ、座間味の方からまつすぐこちらへ舟艇が向つてくるんです。私は岩陰にかくれて様子をうかがつていたところ、山から小森中尉が雑のうを肩にかついで、ゆうゆうと下りてくるわけです。舟艇が浜に着くと中尉はそれに乗つて去つて行ったもんです。この中尉は終戦のときはハローハット(米兵帽)をかぶり、ピストルをさげて米軍に協力していました。

これにはいろいろなきさつがあつて、小森中尉は野田隊長にうらみをもつて敵前逃亡をやつたんだろう、という評判でした。そのいきさつというのは部下のA班長の処刑のことです。

この兵長は最初の戦闘で背中に迫撃砲で穴を開けられて、医務室で治療を受けていました。私は、そのときは医務室勤務にまわされましたから、よく知つてゐるわけです。

この兵長はちょいちょい他人の飯を盗むんです。私も何度も盗まれました。初めのうちは誰の仕業かわからんかったんですが、あ

杉山というのには、杉に似た木が何本か生えているところで、そこは三方に高い山があつて谷間になつています。どこから弾がとんでもあたらない安全地帯です。そこに、三八〇名ほどの島の住民が一か所にかたまって避難していました。避難というより、部落民はそこで一緒に死ぬつもりで集まつていただけです。私もその夜は杉山へ行つて家族と一緒にいました。

翌日、山の上をみると、そこに谷間に向けて機関銃を据えて兵隊が三名ついているのが見えました。後で聞いたんですが、糸林軍医が二名の兵隊をひきいて銃座についていたということです。その友軍の機関銃を見て、住民は、いざとなつたら自分たちを一思いに殺してくれるんだと、安心していました。みんな一緒に玉碎できるんだといふことで、かえつて混乱がしそまたんです。当時の私たちは、とにかくアメリカにつかまつたら、マタ裂きにされて、大変になるんだと、そればかりがこわかったわけですから、敵が上陸して玉碎するんだとみんなが思つていていたわけです。

私の家族と親戚も最初はみんなと一緒にいたんですが、「生きられる間は生きようじゃないか」と誰かが言つて、一族のリーダー格だった伯父(埴花福正)が、「みんながそう言つたら、逃げられるだけは逃げてみよう」と言つて、私の家と伯父の家と、もう一か所の親戚の家族、三世帯だけは、その晩のうちに部落民から離れて独自行動をとることになりました。

次の日、一日じゅう北側の山の中を逃げまわつたんですが、その夕方には銃声もあんまり聞こえなくなつて、島じゅうが静かになつているんです。何となく、みんな玉碎してしまつたんだろうと思つ

るとき防衛隊の人たちが、彼らの飯盒を盗んでいく兵長をみつけたんですね。これが二ノ木主計中尉に知られて、本部にひっぱつていかれたんです。したたか殴りころしたうえで銃殺にしたそうです。

処刑の日に、小森中尉が泣きながらA兵長と話しているのを私はそばで聞いていました。将校連中のなかでもA兵長の処刑に反対した者が多かつたそうです。野田隊長の命令でそうなったんですね。兵長には、最後の食事だと言つて、ギン飯に青竹の箸を立てたのを出してあつたんですけど、ぜんぜん手をつけませんでした。その後で小森中尉が泣きながらA兵長を慰めているわけです。「君はまだ少し先になるだけだ。ぼくらもすぐ死ぬんだから」と言つていました。後で、野田隊長は、A兵長は敵前逃亡の罪で処刑したのだと言つていましたが、私はそとは知りませんでした。

そういうわけで、悠々と投降していった小森中尉は前まえから野田隊長にすごく反感をもつていていたようでした。あれは腹いせで投降したんだろうと思います。

住 民

野田隊長は、住民を殴つたり、処刑したりして、みんなからは反感をもたれていますが、ただ一つ、住民に対する措置という点では立派だったと思います。

二十六日の斬込みの晩、防衛隊の人たちが戦隊長のところへ行つて、「部落民をどうしますか、みんな殺してしまいますか」といふわけです。野田隊長は、「早まつて死ぬことはない。住民は杉山に集結させておけ」と指示したそうです。

て、もうどうにもならないから一緒に死のうということになつたんです。だが、手榴弾は私がもつてゐる二個しかないわけです。それも、一個は急造のヤツで、導火線にマッチで火をつけて発火させるヤツなんです。たつた二個で二十何名も死ねるはずがない、といふのは昨日の戦闘で証明済みです。手榴弾でダメなら、みんな一緒に崖から飛びおりて死のうじゃないか、ということになつて、島の西側に又々(布)のタキ(塵)という昔から有名な絶壁があるんですが、そこまで行つたわけです。

うちの母は店をやっていて、練乳の罐詰を四、五個持つていましたから、その場でそれを開けてみんなで舐めて、それから、水を腹いっぱい飲んでからにしょう、ということで、下の谷川の方へ降りていつたんです。すると、そこで思いがけなく日本の兵隊にぶつかったんです。朝鮮人軍夫なんかも一緒にいるんです。声をかけようとしたら、朝鮮人軍夫が口に指をあてて声をだすなど合図するわけです。「おや、まだみんな生きているじゃないか」ということになつて、兵隊が生きているぐらいだからまだ死ぬことはないじゃないか、と思いなおして、それからまた杉山にひつかえしていつたわけです。

それからは、ずっと杉山にかくれていていたんですが、食糧がなくなつて、これが大変でした。部隊も食糧不足で、防衛隊は漁撈班にまわされて、パトロールの砲艦のスキをぬんで魚とりをやつているありました。私も漁撈班にまわされました。海岸に行くと、たいてい漂流物の食べ物がみつかつたんですが、これも部隊の統制になつっていました。

六月の末ごろだったんですが、中岳というところに部落民みんなを集めて、「住民は逃げなければ逃げてもいい。ただし兵隊の逃亡は容赦はしない」という命令がありました。それから住民はどんどん島を抜けだして、最後まで残っていたのは、私の家族とか郵便局長の家族とか、ほんのわずかの人数でした。島の周辺にはひつきりなしにパトロールの舟艇がやってきますから、浜へ降りて合図をやるとすぐ迎えにきて座間味の方へつれていくんです。それから慶留間に収容所ができましたから、そこへつれていかれるわけです。

ところで、部落民がはじめて島を脱けたのは、命令があつたときよりもずっと前からで、実はその第一号は私の伯父にあたる中村正吉という人です。これはいろいろ問題がありました。

伯父は屋久比の銅山の船の船長をやつておりました。十・十空襲で大きい船はやられてしまって、富島丸という十五屯ぐらいの船をもっていたんですが、三月二十五日、艦砲がはじまつた日ですよ、この船が那船から敵中を突破して阿嘉に来ているわけです。阿嘉の阿護という海岸にのしあげていたんですが、これが部隊にみつかってしまって、船に食糧を積んできただろうといつて詰問されたんですね。伯父は「そんなものはない」と否定したんですが、本部につれていかれて、野田隊長からさんざん殴られたんです。それだけではなく、隊長はわざわざ杉山まで降りてきて、伯父の妻まで大きなくちでバンバンたたいたんです。私は近くでそれを見ていたんですけど、すごい見幕で叩いているもんですから近寄ることもできませんでした。それがもとで、伯母は後々まで体が弱ってしまいました。

その夜のうちに、伯父は「こんなところにいてはどうせ殺される

た。

事件が起ったのはそれからずっと後になつてからで、たぶん六月にはいっていたと思います。山の中の食糧は底をついているもんですから、私は部落の海岸に食糧をひろいに行きました。親戚の英次、良信、武一と私の四人組でした。海岸には、アメリカの船が特攻機に沈められたりして、さまざまな漂流物がうちあげられていました。海岸に行けばかなづかぬ何か食い物があったのです。

私は、籠詰とかバターとかクラッカーなどをいっぽいひろつてきて、それを箱に詰めて、屋間はみつかるといけないから、晩にまたこよう、空家にそれを隠しておきました。それから部落の中を通つて山にひつかえそうとしたわけです。

すると、部落の途中まできたとき、いきなり声をかけられたんです。斥候にでもみつかつたら大変だから、私はびっくりして辺りをみまわしたら、誰もいないんです。すると、今度は「おい、仁勇、仁勇」と名前を呼ぶもんだからよく見ると、すぐ側の、石垣で囲われた山羊小屋から手がのびて、手まねきしているんです。これが行方不明のマツ爺さんだったんです。

私はサッと山羊小屋にとびこんでいきましたら、中は疊も敷いてあって、お婆さんも元気でいるわけです。爺さんは髪をぼうぼうのばして、なつかしそうに親戚の誰かれの消息をきいていました。小屋のなかには、煙草とか籠詰とかクラッカーなんかアメリカ製品が山積みにしてあるんです。それを持って行けというもんだから、四人はポケットやふところにいっぱい詰めて急いで山に登つてきたんです。

んだから今のうちに逃げよう」と言って、伯父夫婦と、ナカさんといふ家族ど、船で逃げていったんです。もちろん米軍の方に投降していったわけです。

マツ爺さんは大阪に出稼ぎに行つてそこで婆さんの家の婿養子になつていたんですが十九年阿嘉に帰つてきました。阿嘉にきてからは、兵舎づくりに専念してずい分軍には協力した人です。

▲捕虜ノ第一号の処刑

私の母方の親戚に後藤マツという六十歳になる爺さんと、その妻の六四、五歳になる婆さんがいました。爺さんの実の姉で、七四、五歳になる婆さんと一緒に暮していました。阿嘉にきてからは、兵舎づくりに専念してずい分軍には協力した人です。

戦争がはじまつても、姉婆さんが足が悪くてとても山には登れない、それで部落内にある壕に三名だけ隠れていたわけです。そこへ米軍が上陸してきて、「出てこい、出てこい」と言われたわけですが出ていこうとしないので銃を撃ちこまれたそうです。それで姉婆さんは即死して、二人はひつぱりだされて捕虜になつたわけです。これが沖縄での捕虜第一号で、アメリカの雑誌に写真ものつていたそうです。

この二人をほかの島に移しておけばよかつたんですが、そうはないで部落内にほつたらかしていただらしい。ときどき宣撫班がやってきて、二人に投降勧告の手伝いをやらしていただらしいのです。防衛隊の人が、「どうもあの声はマツ爺さんの声に似ていた」と言つたとは言えないから、「部落の中でひろつてきました」と答えると、兵隊は四人をさんざん殴りつけて、良信と英次は顔がすごく腫れていました。「まさもらは銃殺だ」と言つて防衛隊が詰めている監視所につれていかれました。私たちも、マツ爺さんが捕虜になつたのか死んでしまったのかさっぱりわからなくて心配しているところです。

野田山の途中にダスク山というのがあるんですが、そこまで登つてきたとき運わるく歩哨にみつかつてしまつたんです。富永という一等兵で、家にもよく遊びに来た兵隊なんですが、これが、「まさもら、どこからきたか!」と詰問してきました。爺さんに逢つてきたとは言えないから、「部落の中でひろつてきました」と答えると、兵隊は四人をさんざん殴りつけて、良信と英次は顔がすごく腫れていました。「まさもらは銃殺だ」と言つて防衛隊が詰めている監視所につれていかれました。「持つているものは全部捨てろ」と言われて、品物はぜんぶ捨てさせられました。兵隊たちは煙草をみるとブルブルふるえていましたよ。

私はそれだけで、銃殺にもならずに杉山に帰されたんですが、その翌日ですよ、爺さんと婆さんがひつぱつてこられたのは、婆さんは耳が遠いので、小屋の中から大きな声が聞こえました。そこへ友軍の斥候が通りかかって発見されたらしいのです。

一晩だけは部落の人たちがいる杉山に帰されたんです。そのときに、これまでの二人の体験をいろいろ聞かされたんです。ところが、次の日、二人はまた本部に呼びだされて、そのまま帰つてきましたでした。その晩のうちに二人の遺体がみつかりました。道のすぐ側に首だけ土に埋められて、体は外でていたからすぐみつかつたわけです。爺さんは軍刀で首を斬られていきました。婆さんは銃剣で刺し殺されました。斬った兵隊の名前もわかっています。

うか。彼らは、ツルハシとショベルと雑のうだけしかもつていませんでした。船から上陸するときは雑のうだけです。軍服と戦闘帽をつけていましたが階級章はありませんでした。この水勤隊には、布沢少尉とか永田少尉とか、二一名の将校、下士官がついていて各班の指揮をとっていました。宿舎は別になっていて、戦闘前には住民との接触はあまりなかつたです。

私が今でもひじょうに印象にのこつているのは、彼らが上陸してくると、各家々の庭から赤いトウガラシを摘んで、これをおいしそうに食べていることでした。みんな辛いのがよく食べられるなあと感心して見ていました。

山にのぼつてからは、総攻撃のとき手榴弾が渡されたんですが、彼らは何の訓練も受けていませんから、使い方もわからなくておろしていました。それから後は、壕の中に、一か所に閉じこめられて監禁されていたようです。成績優秀な者は部隊の使役などやっていましたが、大部分は壕の中に隔離されていたようです。

私が医务室にいるとき、よく朝鮮人の死体が運ばれきました。検死をするわけですが、見なくてもわかりましたよ。みんな骨と皮だけになつてしまつて、明らかに餓死です。壕の中ではろくに食糧もやらなかつたようです。

これらの朝鮮人のなかから、米を盗んで食つたとかで、十数名が銃殺になつたと聞いています。

降伏

終戦を知つたのは、私が漁撈班にいたときですから、六月の末かも

七月の初めごろだったと思います。アメリカの舟艇から、日本軍は敗れた、降伏するようになると、スピーカーで呼びかけてきたんです。また、軍使をよこせとも言つてきたんです。座間味の梅沢少佐も捕虜になりました。梅沢少佐と逢わしてやると言つてきました。会見したのは座間味島に面している小さな砂浜でした。私は山の上からそれを見ていました。向うから舟艇がやってきて、船から担架がおろされるんです。梅沢隊長は負傷しておったんですね。こちらからは、国旗を掲げて副官が先頭に立つて、その後から隊長がついてきました。山の巾腹では、涙をとりまいて機関銃隊が戦闘配置についているんです。何ごとも起らなくて、野田隊長と梅沢隊長が会見して、一緒に上陸してきた二世の通訳と米軍将校は、山の上の本部まで案内されました。どんな話があつたかはわかりませんが、その時は、野田隊長は降伏をことわつたそうです。

その後も何度も交渉があつたらしい。そして、野田隊は、とうとう八月二十三日に降伏しています。

炊事班

座間味村字阿嘉 宮平ウメ子

当時、私は軍に徴用されて炊事班にいたため、三月二十三日の空襲からは常に軍と一緒に行動させられていきました。二、三日は夜を待つて部落に帰り、兵隊の食事を準備していましたが、四日目頃からは爆撃がはげしく壕に入りびたりで、家族の元へ帰るのは許されなか

つた。五一逃げようとする者があれば殺されると思いこんで口に出すことさらおびえていたが、その日には、「お前たちが一緒だと足手まといで、自分たちまで危険だからきょうから家族のもとへ行け」と命令されたため、私達は大喜びで、待つてました、とばかりにみんなが集まっている所へ家族の名を呼びながら走つて行きました。その頃からは、上陸した米兵があちこちに見受けられるため、その日の夕方から杉山の方へ家族と共に逃げていった。

一ヶ月を過ぎた四月二十九日まではこわくて山を出ることができず杉山の方で生活していましたが、その日の喰軍から炊事班は集まるよう命令を受けたため、家族の反対をおしきつて山を出でていった。軍にそむけば、それこそ大変な目にあわされるのでしかたなく出ていったのです。

行ってみると隊長を中心にして二、三人が集まつて話しをしてい

たが、私達を見るなり乾パンを持ってきて配りながら、「この戦争は何日続くかわからない。とにかく何が何でも生きのびないと云ないので、明日から山のふもとにある民間壕で食事のしたくをしてくれ」と言われた。やはりさからうことができないので、部落の防衛隊二、三人にも手伝つてもらつて飯盒に棒を通して炊いた。

一日二日はそのようにしていたが、後からは考え方で乾パンの入つていたブリキの箱に米を洗い、雑炊を炊いて兵隊に食べさせていた。ところがかまどの上は、煙が外に出ないよう木を切つてきて屋根をつけていたが、四、五日使つた頃からはそれが乾そうしてしまい、ある晩、ついにバリバリッと燃えてしましました。

その時までは戦争が静まり、米兵は全部部落の方にいるのを知ら

ないのでまだ周囲にいると思い、あわてて火を消しとめた。そのため、かまどもみんなこわれてしまつたので最初からやりなおさなければならず、今度は知恵を出して部落からテントを取つてきました。そしてあたりを切り開いてかまどをつくり、その上を草の屋根で覆い、さらにテントを上にかぶせた。テントはぶ厚いので燃える心配がなかつたから。

食糧は、最初五〇坪程の倉庫にぎっしりつまつていて空襲で全部焼けてしまい、何一つ使いものにならないため最終手段として農耕班と漁撈班というふうに部落民でグループを組ませ、各自で確保したものを作り出したり、兵隊が部落に行つて逃げまわっている豚や山羊をつかまえては持つてきたりで、ようやく間に合わさせていた。

農耕班は年寄りから子供まで含み、部落民が山に逃げる前に積みつけたものを、夜になつてから取りに行く仕事で、漁撈班は海に行って貝や魚を取つてくる仕事であった。

部落民は自分たちの食糧は、さがしてきて兵隊に渡した分から分けてもらうようになつていました。しかしそれではあまりにも少ないでの、後にはどうぼうまでする人がでてきたり、どうにもならない人々は、周囲にはえている草の葉や茎を食べたり、夜になるのを待つて海辺に行き、流れてくる果物や乾パンを拾つて食べなければいけなかつた。

万が一、自分の畠だからと芋一つ取ろうものならものすごい罰が加えられました。これは軍民間わずなされたもので、見つかつた場合、死刑にまでされました。

私達の場合は炊事班であつたため食糧には不足せず、残りものをもらつて家族や親せきを持つついてやつた。しかし部落民から不平が出てからは長続きしなかつた。でも、時々乾パンの配給があつたし、自分たちで炊事をするので食事に困ることは全然なかつた。

部落民は畠からではないにしても桑の葉一枚どることも禁じられ兵隊でも階級の低いのは勝手に食べるることはできなかつた。

そして食糧難もヤマ場にきた時、三分の一近くの部落民がアメリカのものと逃亡して行つた。その中には何人かの日本兵もまざつていました。

ある兵長の部下が食糧をだまつて食べたという理由で、大ヶガをしてやつと退院できたこの兵長が死刑された例があります。

いよいよ兵長が死刑になる日が来た時、彼の上司の中尉が、「別の隊長の部下からは死刑しないで自分の部下を死刑にするということは、日本魂を持っているはずの兵隊が自分個人にうらみを持つていることだ」と怒つてアメリカ兵のもとへ逃亡してしまつた。

それ以前に、米兵が上陸して攻撃を続けていた頃、ある少尉が朝鮮人二〇人程連れ、白い旗をあげて降さんしたことがあつた。私はその頃、彼がスパイではないかと思つた。というのは、時々、若い女の人たちとおしゃべりをしていると、彼は「もしこの島に敵が上陸してきたら、兵隊は國のために死んでいけないよ。いや、むしろ兵隊たちでも命は大切にしなければいけないがね。命があつてこそ國は守れるんだ。だから私は絶対死はない」などと口ぐせのように言つてゐました。

山から下りてきてからは、家にいても何かしらこわくて、なかなか寝ることができなかつた。山奥には一人寝てもこわくないのに、部落の方はだれかが家にいってくるようではしばらく神経質になつていきました。

今から考えてみると、当時は死ぬというのが当然に思えていて、先に死んだ人が道に横たわつていると「早く死なれてよかつたね。私達はもうすぐ死ぬからね」とか、どうしても上をとびこえないといけないときは、「ごめんなさいね。ちょっと失礼」ととびこえたこともあつたが、あの時のうらやましい気持ちが、今となつては、あの人達だけが犠牲になつたようで申し分けない気持ちです。

南洋引揚者

座間味村字阿嘉　金城初子

私は十五歳頃から看護婦と産婆の勉強をしていたので、十八歳には南洋の方が人不足で手伝ひに行つていました。

いよいよ南洋にも空襲が始まり、沖縄も戦争にまきこまれるといふことを聞いてからは不安になり、親元へ帰ることにしました。その時の船は私達のいるヤルートから沖縄に直接出るのなく、一応バラオにわたつてそこから横浜まで行きました。横浜からは直接沖縄行きの船があつて私はその切符を買つたが一緒に南洋から帰ってきた大宜味村出身の夫婦がいて奥さんがもうじき赤ちゃんが生まれるということはどうしても鹿児島まわりで一緒についてきてく

私達は戦争が負けていることは知つてゐたが、ずっと山の中でがんばつっていました。

ある日、昼食後に一人の子供と軍曹が散歩に出かけた時、米兵に見つかってしまいみんなに取り囲まれてゐる所を友軍がみつけ、それを知らせに来たので山の上は大きわぎになつてしまつました。

しばらくすると捕虜になつたはずの二人が黄色の袋を持って上がり、どうしたのか聞くと「日本はもう負けてしまつたから山に頑張る必要はない。出て行こう、彼らはぜひ隊長と対談したいと言つてゐる」と言つていました。黄色い袋にはパンやチョコレートなどいろいろなものがはいつていた。

隊長は直接自分では行かず代理のものを使つて対談させたため、その時戦争が負けていることはつきりわかつた。山にいた部落民はその頃になつてやつと山をおりる決心をして約半年ぶりにおりてきました。

私達がおりてきた時には、先に逃げた少尉と中尉が立つてゐるため、みんなは腹をたてていていました。

彼らは、さかんに日本が負けたと言ひはつてゐるので兵隊を怒らせた所、うそだと思つて、座間味の部隊長がここにやつてくるので彼の話を聞くように言つていて。

いよいよその部隊長がタンカにのせられ、各将校たちが会いに來た時、彼は涙を流しながら日本が負けたことを語つていました。先に逃亡していった中尉は、私達を見るなり、「やあ、すいじの娘さん達、元気だつたか」と声をかけられた時、殺してやりたいくらいにくらしくてたまらなかつた。

母が毎日港を通つてゐる時、別のおばあさんが自分の娘も内地から帰つてくるということで毎日港に来ていました。ところがその娘さんは私が切符をキャンセルした船に乗つていたため、途中敵の潜水艦にやられて沈没してしまい死んでしまつたそうです。それ後になつてから聞いた話です。

座間味に帰つてきただのが昭和十八年で十九年まではそんなに戦争という氣配はなかつたです。

私はしばらく家で農業の手伝いをしていたが、當時座間味村の屋嘉比という島に鉱山があり、大部分の男の人たちがそこで働いていた。そこではケガ人が多い割に看護婦が足りないということで私の知人からせひ来てくればと知らせが届いた。宿泊場所はあるし、別に一人看護婦がいるというので、私はせつから身についた技をむだにするよりは働いた方がいいと思つて快く承知しました。

昭和十九年いっぱいはそこで働いたが、二十年二月に弟が生まれたという連絡があったので、三月には弟を見に阿嘉に帰っていったんです。帰つてみると父は南洋に行つてまだ帰つてこないし、妹は公務員で勤めに出、母は産後のために働きず、弟たちがきりきり舞いしてました。それを見てだまつておくわけにはいかない。弟たちも私が屋嘉比に引き返すことを心配して、「食べ物は配給をもううから、姑さんの分は僕たちのものから分けてあげる」と言つて懸命に頼みこむので私はむこうの許可ももらわずに阿嘉に残ることにしました。その後、責任者から再三帰つてくるよう連絡があつたが、もう少しもう少しと日を延ばしているうちに空襲になつてしまい、そのまま家族と共に山に逃げるはめになつてしましました。

弟はまだ生後二十日くらいなので私がおぶり、急いで炊いたなま煮えのごはんをふろしきに包み山にもつていきました。ところがなま煮えなのですぐくさつてしまい四日ほど全員何も口にするものがなかつたです。

それから家族だけであちこち歩き回つたが、隊長命令で杉山に集まるよう言われたのでそこに避難することにしました。

そこでは家族ごとに小屋をつくり避難していました。

食べ物はソテツを切つてきて食べたり、海岸から漂流してきたものをひろつてきたりしました。ところが海岸からひろつてきたものはほとんどがバター・やラード、イースト菌などで腹ごしらえになるのはほとんどなかつた。後になってよもぎやはぶきを取つてきて食べたが軍にみつかると首がなくなるのでいつも戦々恐々でした。母などは産後の疲れが重なつてマラリアになり、栄養失調も手伝

つて目もとがはげて熱を出してしまいました。私はマラリアとは知らずただブルブルふるえているのをみて湿しつぶしたためさらに悪化してしまった。その時から空襲がはげしく危険な状態になつたため、母は、「この小さい子をして逃げる力はないから私は子供と二人ここで死ぬよ」という。私達は元気のない母を見て不安になりました。

しかし、最初母だけがマラリアだったのがあとで弟たちにまでうつつてしまい、その時からは病気をほつたらかしたまま逃げまわつたため終戦後まで患らつっていました。

途中、食糧難が深刻になつてからは軍も民もアメリカ兵のもとに逃げてしまいわずかだけが残されました。米やつはぶきなどは全部軍に没収され、私達は精米後のぬかをこつそりとつてはわずかの配給の水に一晩つけてから海で拾つてきたラードでいためて食べたりしました。

その後、食糧をとつたという理由で一人の兵長や朝鮮軍夫が銃殺されたため、私達は恐ろしくて軍に反抗できませんでした。したがつてこれまでアメリカ兵が敵であつたものが、遂に日本兵が敵のように思え、一緒にいて毎日びくびくの状態でした。

終戦の知らせは飛行機でビラをまく方法がとられていましたが、ビラがおちてくるのを部落民が拾いに行こうとすると日本兵が「あれは毒がぬられた紙だから絶対にとつてはいけないぞ、あれをさわると死んでしまうから。」とおどかしていたが、私達はそんな

ことにかまわず拾つてみた。すると、戦争は終わり、日本は負けてしまつたから降伏するように、というような内容の文章が書いてありました。しかし日本兵は「アメリカ兵はうそつきだから絶対信用するな」というので、私達はその後何日か山にいたが、ある日、全員おりてくるようにと大声で呼びかけがありました。それでも山に頑張つてゐるときかんに砲弾がとんでくるためびっくりして下りて行くことにしました。

私が下りてきた時に、終戦の何やら式典が行なわれている所でした。ちょうどのぞいてみると、米兵と日本兵が並んで立っているが国旗はアメリカのものがあがり、國歌もアメリカのものを歌つている。しばらくすると日本兵は腰にさしている銃や日本刀をぬいて全部一か所に集めアメリカ兵のもとに持つていくのを見てなきれない氣持ですごく腹が立ちました。その翌日、日本兵はアメリカ兵の船に乗せられ、どこへやら出でつてしましました。

三日すると爆音がおかしいことに気がついたのでウナン崎という所に逃げて行つた。しかしあととウナン崎についてホッとしていると、何と下の方には敵の軍艦がギッシリつまつてゐるのです。それが確かに敵の軍艦だとわかつたので今度は山の方に上がつていつたがそこにはだれも居ず、不安になつたため、みんなをさがしながらさらに山の中へはいつていくと大ぜいの部落民があつまつてゐる。ところが私達が着くなり、ここが危険だということでみんな杉山に逃げていつた。私はこれ以上歩きまわるのは無理な気がして妹と一緒にそのまま休んでいることにしました。

しかし、あたりは焼け野原になつてゐるため長くいることはできず通信隊の壕を頼つていつた。そこは入口が二つあってむしろのカーテンでおおわれ中には食糧品がはいつていて。そこに来てしばらくしてから他の子供たちがあまりにも大声で泣き出すので危険を感じ八歳の長男をつれて山の上に登つていつた。すると突然機関銃の弾が私達の目の前をとんで来たのでそれ以上進むことはできずまた引き返してきました。その時からは夕方になり弾はとんでこないので三〇人くらいまとまって部落民が集まつてゐる場所に移動していく。ところが着いてみるとだれ一人残つてゐる人はなく焼け残りの釜だけがころがつていて。そこで腹ごしらえをしようと持つていた米でごはんを炊いて食べました。

朝早く起きてみるとアメリカ兵が周囲を歩きまわつてゐるというので、みんな静かに身づくろいをし移動の準備をした。私は今さら生きる必要もないと思つていてるのでそんなに乗気ではなかつたが、あまりにもみんながすすめるので後をついて行くことにしました。

戦場で出産

座間味村字阿嘉 中島 フミ

当時、私は一度に子供三人を亡くしている上、お腹には八か月の赤ちゃんがいたため元気がなく、あまり遠くに逃げて行けなかつたです。それに南洋にいた頃、空襲を何度も味つていて二十年三月二十三日の空襲があつても、そんなにこわくはなかつた。その日には近くの壕まで行き、夕方になると家に帰つていつた。ところが二、

その頃からは大雨で道を歩くのもやつとのため、近くの軍の壕にはいっていった。そこには軍曹が一人いるので許可をもらい一晩とめてもらつた。私達は部落民は全部死んでしまったと思いこみ、生きるのぞみもないためその軍曹に殺してくれとお願いした。するとその人は「お前たちは心の底から死にたいとは思つてないから殺さない」というわけです。しかし私達が熱心にお願いするとそれでは、という事で五人に一コの割合で手りゅう弾をわたしていくた。

私達は死ぬ前に、各自で持つてあるソテツのでんぶんを足でふんづけて死んだ後米兵に食べられないようにした。そして計画は夕方決行することにした。しかし手りゅう弾でやるにしても全員が完全に死ねるかどうかわからないので、軍曹に地雷をとりつけてもらい爆発後生き残ったものは部落の二人の男の人が日本刀で殺すということで二人は残ることにした。ところが決行を待つてある最中、その軍曹が部落の一人の若い女人に目をつけ、つかまえようとしている。その人が来たおかげで部落民が生きているということを知り、死ぬのをやめて部落民の避難先に向かつた。みんなそろつて目的の場所に行くとそこでは全員米兵が上陸してきたといつてさわいでいる。私達は危険だと思いつける別の場所へ移つていった。着いてすぐ子供が生まれどこにも動けなくなつたため、しばらくはそこで身をおちつけることにした。その後、ほとんどの人たちが食糧不足で困つていたが、私は妹が男まさりのおかげであつちこち一人でかけずり回り、日本兵に発見されないよう食糧を適当に持つてきてくれた。

防衛隊の戦闘参加

座間味村字阿嘉 与那嶺 康永

私は当時、防衛隊長で敵の上陸以前から日本兵と共に軍の仕事を手伝っていた。防衛隊の仕事は主に夜を待つて敵の情報さぐりをする事であった。いよいよ敵が上陸してきた。最初は部落に上がつただけであります。

つたけど、翌日から山の上に百人程が上がつてきた。それを知ると部隊から全部に戦闘命令が出された。私たちも戦いに参加しなければならず、日本兵を睨み込むようにして配備された。

防衛隊は山のふもとに三人ずつで組織して見張り、敵が上陸してくると撃ち殺すが、もしくは日本兵に連絡するかの役目であった。

当時、防衛隊の食事は一日おにぎり二コの配給だけで敵が上陸した二十六日に一晩かかる自分に入るたこつぼをほつたため、翌日敵が山に上がつて来た時からは、疲れと腹が減つてるのが一緒になつてしまい軍から見張りを厳重にしろと命令されても懶けには勝てず、一番前で見張りをしながら居眠りをしてしまつた。

しばらくすると左にいる人が殺されたため、その銃声で私は目がさめてしまつた。彼は私が、敵がここまで来ているから擬装をしないと注意したが、どうせ、どんなにカムフラージュしたってだめだからと配給にもらった煙草を左右に二本くわえて吸い、たこつぼに入つたまま身のまわりを隠そうとはしなかつた。

案の定、敵はやつて来て彼を殺してしまつたのです。敵は私と彼の間に入つてきたが、私は周囲を草でかくしていたため発見されることはなかつた。それで敵が道の方に歩いていた時、いつ何時発見されるのかびくびくなので、安全装置をはずしていつでも撃てる準備をしていた。すぐにでも撃つてはすれてしまうとそれこそ危険なので、相手に発見されるのを待つていた。彼らはしばらくして上方に歩いていき、日本兵の所までいくと一人を撃ち殺し、更に発砲しながら私達の方へ後ずさりをしてきた。

その時、弾がなくなつてしまい弾を入れかえ今度はまつすぐ私の

た。それで母乳が不足することもなく、親せきの赤ちゃんにまで与える余裕があつた。ところが部落民全員が私達と同様であつたとは言えず最悪の事態には半ば命令でアメリカ兵のもとへの逃亡がよびかけられた。私達も親せきや友人からさそわれたが、子供たちをこの島でなくしている上、あくまでも日本人だから、という希望もあり、死ぬとしたらこの島以外の場所は考えられなかつた。わずかの人たちと一緒に八月中旬頃まで生活をともにしていました。

八月のある日、飛行機からピラがまかれ、終戦と同時に日本が負けたことが知られたため、私達は山をおりていかなければいけなかつた。その時のくやしい気持ちは何とも表現できない。私の家に宿泊していた将校の一人は涙を流しながら、「おばさん、十年後に再び戦争をして必ず勝つてみせるからね」と私達をはげましてくれ、当時の私達はそれに期待もかけていました。

しかし、もう二度と戦争のときの食糧難のにがい経験は味わいたいとは思いません。

それを聞いてか米兵の一人がいそいで駆けつけてきたが仲間が大怪我しているのをみてビックリしてしまい逃げてしまつた。その後、私はとどめをさす意味で苦しんでいる米兵に二發目を発砲すると後の方が先に死んでしまつた。最初は弾が貫通しただけで、おきだして大声で泣きだしてしまつた。

私たちのいる方針ボンボン手榴弾が投げこまれてきた。私は逃げていつた米兵が仲間をよびにいつたと思ったのと、友軍からの手榴弾が危ないので大急ぎで隊長のいる頂上の方に逃げだしていつた。

途中、伍長に会い、話しかけていると突然手榴弾が落ちてきたため、急いで隠れながら伍長に上が安全だからこうとさうと、どうせ向こうにいつても殺されるんだからということでとうとう私人で隊長の方へいった。私が入つてくるなり隊長は車からはどういう命令であつたか、ときくので私は、はい、死守せよ、という命令でしたが友軍の手榴弾が激しいので同じ大死をするんだからと引き揚

げてきました。というと、バカヤロー、という返事がかえってきた。

彼はそれで敵状はどうだったかというので私は先程の米軍の状態を聞かせてやると二人を殺したという私の言葉をきいて、そうか、やつたのかと、りっぱなひげにつばをつけながら目を細めた。私は部隊長の前にすわらされ、しばらくは日本兵と共にいたが、やがて木の間から百人程の頭がとび出し徐々にこちらにやってくるのを見つけた。その時、遠くの方で敵だ、敵だという声が聞こえたため隊長はすぐ突撃命令をだし、自分が先頭に立って「つっこめー、ワーッ」という大声でつっこんでいった。敵は百人程、味方は三人程度であつたが、その大声に敵はどきもをぬかれ逃げていってしまった。

その声をきいて下の方に歩哨兵として立っていた兵隊はもう最後だということと、私達の方にやつてきた。来る途中で二人の米兵が死んでいるのをみつけ、火焰放射器と自動小銃をうばつきていた。

隊長は彼に、米兵が機密書類をもっていないかどうかを聞くと、知らないという事なので、隊長と私と今きた兵隊の三人ですぐ遺体の方へいつたがわずかの時間にもう運ばれてしまつて何もなかつた。敵はきっと近くにかくれていたのだろう。でも敵はそれ以上、山上に登つてくることはなく、私たちは一日ごとに歩哨兵として警戒に立つていた。その後は食糧運びをする朝鮮人で組織した水勤隊の監視をしたり、降伏しているとする日本兵を見張つていた。そのような人には注意をして、それでも云うことを見かなければ撃ち殺してもよかつた。しかし後には食糧難のため降伏を許したが、その時には菊の紋の入つた銃はかならずおいていくように注意しそして万が一步哨兵にとらえられたら、うち殺すかも知れないよと言つ

ていた。知れないよというのは隊長の任務を考慮した上で言ったのだろう。私たちも自分の隊長が逃げたのでにげる方が勝ちだと思い降伏していった。民間人は直接、慶留間部落の方につれて行かれたが、兵隊や防衛隊は一たん、座間味に連れていかれ、それから慶留間の方で調べを受け、最後はハワイに連れていかれた。隊長には、座間味の少佐も降伏しているから阿嘉も降伏していくのがいいじゃないかというと、捕虜になつた者は少佐ではないといつて受けつけず、とうとう八月下旬までがんばつたらし。

自決を思いとどまつて

座間味村字阿嘉 仲 地 和 子

私達は南洋で大東亜戦争にあつたため、追いかけられるように座間味に帰つてきました。というのは、戦争が始まる直前に次男が生まれたので、ここにいると子供たちがあぶないと想い、夫を残して長男と次男をつれ、安全と思った阿嘉に帰つてきたわけです。

それから三年後夫が帰つてきただが、すぐ兵隊にとられてしまい、私は子供たちをひきつれていまわつてきました。ちょうど三月二十三日の空襲が始まつた頃、四月生まれる予定の子供がお腹にいたため、歩くのもやつとであります。そして逃げる時には自分の洋服は持たずおしめを十枚程持つて、非常用にわざかのこげごはんを乾燥させたものを持っていました。これは炊事班にいた姪からもらったもので、私はいつも姉の家族にくつづいて歩いていました。

三月二十六日の米兵上陸の頃からは、部落の人たちは山奥に逃げ出しましため、私はとうていおいくことができるはず、ほつたらかされてしましました。そして二、三か所の家族が私達と一緒になり、まる三日、弾の中をくぐりぬけながら走りまわつてきました。

逃げまわつて三日目の夜明け方、こうして逃げまわつてもどうせ死ぬもんだから、思いきつて自分たちだけで死のう、と語がまとまり、兄が手りゅう弾を一個持つていてそれを使うことにしました。その時一人の男の子が、自分は死にたくない、と大声で泣き出したため、少し思い留まり、それではどうせこの弾一コでは全員死ぬことはできないから各自思い思いに死ぬことにしようと話しました。すると親せきのおばあさんが、自分たちは近くに絶べきがあるのでそこからとびおりるから一緒に行こうと言つたが、私はあまりにものどがかわいていたため、少し水を飲まなければまだ死ねないと思い、下の方に水を飲みに下りていきました。そこにちょうど朝鮮人軍夫がいるので、部落民はどうしているか聞いてみると、全員生きているという。私達はそれから希望をもちだし、死ぬのがバカバカしくなつてきたので、その後、部落民のいる杉山の方に移動して行きました。私達が行くと、みんなびっくりして「あそこから来るよ。生きていたんだね。」と話しかけていました。

ここでは食糧が簡単に確保できないので、夜、軍の監視をぬつて、人と同じように食糧をさがしに行くことができませんでした。煙に行き芋と野菜を取つてきて命をつないでいました。しかし私の場合、子供はそろそろ生まれそくなつて、腹がすごく大きくて、人と同じように食糧をさがしに行くことができませんでした。

私がふとんを頭にのせて立つてゐるのを見て叔母は、「あなたがお産したら上げようと思つてたくさんコンビーフや牛肉をとつておいていたのに全部本部にとられてしまつた」と大きな声でつていました。そして私が帰つていく時にはさかんに名前をよびつづけていたが、軍がみはりを統けているためどうしようもなかつたで本土出身で、フィリピンにいたという事もあつてその疑いがかけられたと思います。

私がふとんを頭にのせて立つてゐるのを見て叔母は、「あなたがお産したら上げようと思つてたくさんコンビーフや牛肉をとつておいていたのに全部本部にとられてしまつた」と大きな声でつっていました。そして私が帰つていく時にはさかんに名前をよびつづけていたが、軍がみはりを統けているためどうしようもなかつたで本土出身で、フィリピンにいたという事もあつてその疑いがかけられたと思います。

四月に生れる予定の子供が、やつと五月になつてから生まれてくれた。どうせ生まれても捨てるつもりであつたため、そのままほつ

たらかしていた。すると一緒にいたおばさんが暗がりをマッチをつけて子供の顔をのぞきこむので、私はみたら気がかかると思い、見ないようになると、『そのおばさんは、「とってもかわいい子なのに捨てるのはかわいそよ」と言うし、親せきのおじさんは、おばあさんの生まれかわりかも知れないから育てなさい、』と言うのをしかたなしに育てることにしました。

子供が生まれて十五日めには待つてましたとばかりにさっそく芋を盗みに行きました。私の他に二人一緒だったので大きな袋のいっぱいとて頭にかついでいました。ところが途中、軍の監視にみつかってしまい、さんざんしかられる結果になってしまいました。私は、子供が生まれたばかりで今まで何も食べてないから、と無理にお願いしてやつと許してもらいました。ところがもう一人の人は、前にも確かに盗んで行つたということで、さんざんになぐられてしまつた。実はこの人は初めてだが、以前にこの人にそつくりのおばさんが何度もかつかまつていたので同じ人だと思つてやつたのです。

部落の人たちはみんなそのような目にあい、なぐる、けるの暴行をうけた人が多かった。しかし、軍はみんな同じように暴行を加えたかというとそうではないです。部落民にはいつも軍は平等だ、と言つているくせに、実は知つている人たちはいつも見逃していました。食糧だけではない、川の水も勝手に飲んだり、せんたくしてはいけないという事で、いつも監視の目がきびしくて私たちなどどうてい入れてもらえないかったです。ところが軍の知り合いの人たちは自由に水を使用していました。彼らは私たちには、お産のうぶ湯にする水さえくれなかつたくらいであるのに。その頃から私たちは軍

に不信を抱き、アメリカ兵よりもこわくなつていました。

阿嘉島の戦闘経過

座間味村字阿嘉 壇 花 武一（十八歳）

この体験記は、垣花武榮さん（当時区長代理、四六歳）の書かれた体験記に基づいて、垣花武一さん（当時、義勇隊、十八歳）、宮平梅子さん（当時、炊事班、二三歳）、その他三人の方に阿嘉島の戦闘概略として話してもらつた。

（字）座間味 宮城晴美記

昭和十九年、九月十一日（十二日？）、阿嘉島には古賀隊長の率いる球一六七七八部隊六〇四人からなる兵隊さんたちが来て、主に基地の設営隊として毎日、突貫隊と舟艇のための壕掘りを続けていました。

阿嘉島へのアメリカ軍の初の空襲は、昭和十九年、十月十日で、被害は軍一人、島民二人の負傷に終わりました。

さらに空襲後、十一月にはいつてから、野田少佐の率いる海上艇進隊（船舶突貫隊）、球一六七七八の一〇〇余名が来島し、彼らはトラックのエンジンをつけ両側に二コの爆雷を備えつけた全長五メートルのベニヤ艇を、敵艦への体当り艇として百隻ほど持ってきていました。そして、一、二、三中隊編隊からなり、一、二中隊は阿嘉島、三中隊は慶留間島に駐屯することになりました。

ところが、せつかく島を守りに来て下さったのに、食糧不足から

赤痢が発生してしまい、一時は部落内が不潔そのものの状態にまで陥つた事もあります。

翌二十年の二月十八日、本島から兵隊が少ないという報がはいつたため、古賀部隊は全員那覇に引き上げて行き、その代わりに水上勤務隊として朝鮮人四〇〇人が駐屯することになりました。また同日、島内の十五歳から十八歳までの男子が義勇隊として召集され、水くみや斬り込みの訓練が行なわれるようになり、事態は急速に変わつていく様子でした。

さらに三月八日には、屋嘉比島（現在無人島）、阿嘉島、慶留間島にいる二歳から四六歳までの男の人たちが防衛隊として、八八人召集されて軍に編入され、毎日のようにきびしい訓練が行なわれていました。

三月二十三日からは空襲がはじまり、二十四日には敵艦が島の周囲にいるということで、「敵艦見ゆ」の連絡を受け、それから部落民全員が山に逃げることになりました。

二十六日の午前八時頃、艦砲射撃と共にアメリカ軍が上陸してきました。そのため、私達はそれを知りながらも何の抵抗もできないままに、敵を迎えるより他に手はありませんでした。我が軍は戦闘を開始しましたが武器は少ないし、大した戦果はありません。

通信隊の柴田少尉は、この調子では部落民も兵もだめだというところで、どうせ死ぬものならと、「阿嘉島守備隊、最後の一兵に至るまで勇敢奪回、悠久の大義に生く」の電報を打つと、受信機だけを残して発信機をたたきこわしました。

私達は、アメリカ兵の上陸と共に、さらに山奥の方へ逃げていきました。

ました。しかし、山奥まで逃げのびられるのは足が丈夫な人たちだけで、誰かにおぶつてもうれない年寄りは、近くの壕でびくびくしているより他はありませんでした。

山奥に逃げた軍と部落民は、共に生活しようということでごはんや水を平等に配給し、「先に至るまで食糧はすべて天皇陛下のものだから、勝手にとると死刑に処す」と強い命令を下していました。

アメリカ軍は、上陸すると同時に施設や壕をくまなく捜索して歩きました。そして見つかったのが私のおじである後藤松夫（当時六歳）、妻のタキエ（当時六歳）、おばの金城タマン（当時七三歳）の三人です。アメリカ兵がさかんに「出てこい」と言うので、叔父夫婦は先に出て行きましたが、叔母は耳が遠いため、言つてゐるのがわからなかつたのか出るのが遅く、壕内で射殺されてしまいました。

つかまつた叔父夫婦は捕虜となり、部落の焼け残った家に保護され、米軍から食糧や衣料を提供してもらつて生活していました。私はたまに二人に会いに行つたりしましたが、叔父夫婦は、「アメリカさんはいつも、『山にいるかわいそな人たちをあなたの方でおろしてきなさい』と言つてゐる」ということを私に話していました。しばらく二人はのんびりとした生活を送つてましたが、四月の半ば、突然、歩哨兵に見つかってしまい、捕虜となつている事がすぐ隊長の耳にはいつてしまつた。隊長は、叔父の妻がフィリピン帰りであるからと、『口実の下に、スペイ容疑として、部下に死刑するよう命令しました。部下は命令をうけると、さつそく二人を山の方に連れて行き、日本刀で刺し殺してしまいました。私は現場

を直接見たわけではないですが、それを目撃した人の話によると、叔父夫婦は日本刀では完全に死ななかつたため、兵隊が石を使って頭をメッタ打ちにして殺したそうです。

その頃から食糧事情はますます深刻化し、周囲に生えている野草まで食べるようになりましたが、それにも限度があるため、日本軍は部落民の動きに警戒するようになつてきました。つまり、畑からは部落民に食糧を取られるのが気になつたのでしょう。ところが部落民は「腹に腹は代えられない」と軍の非常線を突破し、自分の植えつけた野菜や芋を、暗がりの中をさがしに行く人も出てきました。しかしそれが見つかってしまうと全部軍に没収され、おまけにたいへんな拷問が加えられました。同じ部落民が拷問を受けるくわしさは何にも例えられません。

その後の食糧は、軍の焼け残りの米、乾パン、罐詰類など、防衛隊が徹夜で運んできたものでした。しかしそれも長持ちしません。日がたつにつれて軍・民共に食糧難でいよいよ食糧戦争が始まり、兵隊同士の争いなど本格的になつてきました。

飯盒を盗んだという理由で銃殺された兵隊、逃亡しようとして失敗した朝鮮人十二人の銃殺、など、ほんとにこの世の人間のなせるわざとは思えない事が簡単にやつてのけられました。特に朝鮮人の場合、まず銃殺場所に連れていく前に、炊事班が炊いた白いごはんをおわんに山盛りにして入れ、籠入りのパインを二コずつ食べさせていましたが、これまでの飢えをしのぐためか、あるいは自分の最期の食べ納めのためか夢中でかけこんでいました。

部落民の話しによると、彼らは殺される前に体長ほどの穴を掘ら

され、その前に立たされて撃たれると穴にころがる方法になつたようです。兵隊が上から砂をかぶせた後、まだ十分には死んでないせいが砂がムズムズ動いている人は、日本刀で何度も刺して殺していました。

その他に部落民の場合は、前にも述べたように銃殺までには至りましたが、二、三人の人が半死状態になるまでの拷問をうけました。

食糧をさがしに行って見つかれば以上のような苦しい目にあわさ

れ、そうかといつてさがしに行かなければ三〇人程の人を餓死させてしまう始末です。その頃から、部落民はアメリカ軍よりも、次第に、味方であるはずの日本兵に恐れを抱くようになり、逃亡する人が目立つてできました。逃亡する手段として、日本兵に見つからないようこつそり浜辺に出て手をふれば、島の周囲をとりまいている米艦からゴムボートが出され、迎えに来てくれました。ふだん日本兵から、捕虜になった時のアメリカ兵の態度がどういたものか何度も聞かされていましたが、その時点ではもう、お腹を満たしてさえくれるのなら、という気持ちが強く、うわさなどは問題にしませんでした。もしいうわざが事実だとしてもどうせどこにいても死ぬものだからという気持ちがあったため、いさぎよく海に飛びこんで死ぬつもりでいました。しかし、アメリカさんたちは、おかしくチヨコレートをお腹いっぱい食べさせてから逃亡民を慶留間に連れていって下ろし、自分たちはまた船に戻っていました。

逃亡した部落民は、日本兵に見つかなかつたおかげで成功したかといえばそうではありません。日本兵は住民が逃げていくのを黙

認していたのです。つまり、それだけ食糧事情が悪化していたわけです。逃亡者の中には部落民だけでなく、日本兵も加わっていました。

その後、公然と逃亡許可がおり、六月二十二日、野田隊長は、「降伏したいものは山をおりてよし」という命令を出したため、三分の二近くの人が小さい子供たちを連れて米軍の方に行きました。

八月になって、米軍が島の周囲から、スピーカーとビラで終戦を知らせてきました。しかし、だれも出て行こうとはしませんでした。

何日か同じことが繰り返されていたある日一人の日本兵が浜辺の方でアメリカ兵に見つかってしまいました。彼は殺されると思つて逃げようとした際、何と慶留間の方に逃亡していた日本兵の一人の中尉が、アメリカ兵のそばに立つて、一生懸命彼の名を呼んでいるらしいのです。中尉は、通訳するかくこうで、隊長に会いたいと言つてきました。彼は何か米兵と親しそうに話をしているため、近くまで来て見ていた私達は、彼がにくらしくてたまりません。走つていつて彼をつかまえ、たたきのめしたくさえなりました。しかし、大ぜいの米兵が一緒に、そう簡単にはいきません。

いつの間にか彼らの申し入れが隊長の方に届いたらしく、隊長は米兵が信用できないという理由で副隊長をかわりによこしてきました。副隊長は、米兵から終戦になつたことを聞いてもなかなか信じようとはしません。もちろん、私達も信じていません。私達は友人二、三人集まって、「たとえみんなが山をおりても、私達はずっと山をはなれないことにしよう」と決心すらしました。ところが米兵は、しようがないということで、ひざをやられて那覇で治療を受け

ていた座間味島駐屯の梅沢部隊長と会見するよう約束させ、翌朝、八月二十三日、私達はタンカに乗せて連れて来られた梅沢部隊長から終戦の事実を知られ、悔しさをこらえながら、部落民全員、ちょうど半年ぶりに山をおりてきました。

食糧問題

座間味村字阿嘉 照喜名 定 盛

これまでに阿嘉部落の人たちが話してきた戦争体験というのは、もっぱら主觀的な立場で訴えてきたため、前後の理屈があわないものが多かった。ところが去年、合同慰靈祭に参加した当時の将校達の話では、それらの事が誤解であったという事で、最近やつと明るくなつてきた。従つてこれまでの証言のしかたと今後のしかたではある程度異なつてきているのではないかと思う。

特に食糧問題についてみると、なぜ食糧についてきびしく取り上げてきたかというと、ふくろのねずみで包囲されているため、現にここにある食糧を確保しないと、ゲルマや座間味のように食糧の面で自決につながつていくということ、さらに何か年続くかわからないので、軍に抵抗したつてむだであることなどもあって、あくまでも生きのびるために個人行動はつしまなければならない。従つてそれをきびしくしたのが阿嘉島の実情であった。

いよいよこのままの状態ではどうしても食物が確保できないといふ事態が迫つてくると漁撈班、農耕班というグループをつくり、夜

になるのを待つて食糧集めに出かけた。ところがそれでも限界があつたため、しまいには部隊解散ということになってしまった。人々が減ればそれだけ助かるというわけである。それで多くの部落民が手を上げて米軍のもとへ行つてしまつたが、その時点において、米兵は、自分たちのもとに逃げてくるのには危害を加えることはしない、ということを知つていたので、半ば強制の形で部落民を逃がしていた。

つまり食糧争いや、銃殺などのみじめな事をするより、むしろ降伏した方がいいのではないかと考えていたのである。

残つた人々は二か月程山で頑張つていたが米軍との条件のやりとりで降伏していくはめになってしまった。

今から、食糧問題について当時を振り返つて検討してみると、畑から食物をとつていく人を監視したり、畑へ連なつて道々に立つてはそこを歩く人を調べ、万一お芋一つ持つていようのものなら、さんざん、なぐるけるの暴行を加えた上、それを奪いとる、というような事は軍命令としてなされた恰好になつていて、実情を聞いてみると、一般の兵隊が口実として軍命令だと偽わり、民間人をいじめていたことが明かるみ出てきた。

しかし、米や木の葉一枚取つてもいけないというのは、隊長の命令であり、それにそむくものは、銃殺されることさえあつた。

私も当時防衛隊として徴用されていたが、食糧というものは今では豚ですら口にしない木の葉の雑炊を食べさせられていた。それで体の骨がでっぱり、すわる時には、骨盤が直接皮にぶつかって痛いので、横に休んだりした。また道を歩く時には自力では無理なので、

杖を一本使って歩き、休むときは必ず木のそばに行つて休んだ。なぜなら、一人ではすわることも立つことができないので木を頼らなければならなかつたからである。

私は一応食べるものは熱を通したから良かつたものの、朝鮮人軍夫は、つはぶきの茎を生のまま食べてたが、その草は何しろあくが強いため、食べては吐きだし、食べては吐き出しのくり返しで、まともに食べる様子はなかつた。

食糧は山ばかりではなしに、海から流れてくるものをさがしにかけて拾い集めたりした。米軍が流したものばかりで牛肉やビスケットの罐詰などが流れてきたが、中にはコールタールでまつ黒に包まれた肉などもあつた。しかし、そういうものを拾つているといふことがばれたら、半殺しになぐりつけた。

とにかくここまで食糧難に見舞われたのは阿嘉島以外にはないのではないかと思う。

慶留間の集団自決

座間味村字慶留間 中 村 米 子

昭和十九年頃から小さな空襲が何度となく続いていたため、私はすでに空襲には慣れていた。

二十年の三月二十三日にやや大きめの空襲が始まつても、いつも脅かし程度のものだらうとそんなに深刻に考えず、例のごとく近くの壕に年寄りを避難させるだけであった。それが二十四日にも同

様で、その日の午後から艦砲射撃が始まつたため、みんなはいつもと様子が違うことに驟然とした。私達も午後三時頃になつて父を先頭にウンジャ河原という所にある壕へ逃げていつた。

当時慶留間には一中隊といわれる部隊が配備されていたため、部落民は万一の場合の一中隊に集まり、そこから第二、第三中隊のいる阿嘉島へ渡つて行こうということだった。しかしいざとなつた時には敵艦が島のまわりを取りかこんでいるので島から出るどころではなかつた。

私達はウンジャ河原の壕を出てみんなと行動を共にするのに連れないので、年寄りを下の壕に残して行くことにした。その時父が、「もうこの機会にみんなとは生き別れになるはずだが、いつか戦争がおわつて会えるんだつたらまたいつか会おう」と泣きながら言つたため、みんなも胸がつまつて何も言えなかつた。そして私の祖母も涙ながらに「あなた方も元気に行きなさいね。私達は年寄りだしうちもできないから」と言い、私達は別れを告げて上方に登つていつた。しかし途中まで行くとアダンの木が前方にさがつていて、ものすごい艦砲射撃とその破片がとび交うため前に進むことができなくなつてしまつた。アダンのすぐ向こうは部落民の自決場でみんなに違ひなく、自分たちだけが取り残されはしないか気が気でない。そこで父は「今出でいたらそれこそ大変だから絶対出でていつてはいけないよ」と言いながら舌の根もかわかぬうちに自分からとびだしてしまつた。人がとびだすと蜂の巣をつづいたようにみんな一齊にとび出していつた。そしてみんなは親せきの壕に逃げて行き、私達も近くにおじの壕があつたのではいつていく

と、「今は戦争なんだよ。お前たちまではいつてくるところにいるみんながやられててしまうんではないか。そうなつたらどうするんだ」と、とにかく「出て行け」と言わんばかりにぐちをこぼし出した。母や妹たちはぐちを言われながらも出ていける状態でなくただすわつたままでいる。

しかし私はそう言われては中にはいる氣もせず、入口に立つていると、私のおばがぐちを言う人たちに「こんな状態になつて今さらどうして命が欲しいの。親せきは命を共にしようと集まつてきてるんじゃないの。」と言つたので私はその言葉に少しすくなおな気持ちになり入口にすわつていてが、やはりいい気持ちはしない。あたりの状況を見てすぐさま年寄りのいる部落の近くの壕にひき返していつた。

ところが、年寄りは、若い人は命を大切にしなければいけない、というのでしかたなくまたもどつていつた。一晩はみんなと一緒に泊まり、翌日持てるだけの荷物をもつて部落民が集まつてゐるウンジャ河原へと歩きだした。しかし、途中で引き返してくる人たちに出会つたので、どうしたのか聞いてみると、ウンジャ河原は全部焼かれてしまつてそこには安心してくれることはできないと言うのである。それでも私達は自分の目で見ないと安心はできないのでそのまま歩いていつた。

ところが着いてみるとやはりさつき言われたように焼け野原でかかる場所もない。しかたなく近くにある自分の壕にはいることにした。しかし壕に行つてみるとその頃からは四方八方から避難してきた部落民でいっぱいになり、はいる余地がまったくない。それで

も私は自分たちの壕だから、と無理につめこんですわることにした。その時からは両親や妹たちは別れていた。

二十五日の明け方、父が帽子におにぎりを入れて私をむかえにやつてきた。おにぎりをもつてくれたと言うてもこれだけの人数ではわずかしか口にはいらない。

父は私をむかえに来たはずなのに帰る時には何も言わず一人で帰つてしまつた。その時父に声をかけられていたら、私はこの世の人ではなかつたのである。

二十六日、近くにいる年寄りの事が気になり、壕の上方にかくれてちょっとのぞいてみると、大せいの米兵が船を下りて上陸してくるのである。その時、日本兵がシナで行なつた残ぎやく行為が米兵によつてそのままなされるという話が頭をかすめたため、これは大変な事になつたと思つた。壕の中にいる人たちに急いで知らせてすぐ逃げるよう大声で叫んだ。すると一人の主婦が、「私達は子供をつれてはどこまでも逃げることはできない」と言うとみんなも不安をうに「こんなにたくさんでは一度につかまつてしまふ。」と言うので私はある案を思いついた。つまり二手に分かれて逃げようという事である。みんなはそれに賛成してくれ。私の言うままに二手にわかれて逃げ出した。

しかし、歩ける人だけがそうしたのであって年寄りは逃げようにも歩けない。一人のおばあさんは孫を私の方に連れてきて、自分は逃げることはできないから孫と一緒につれていくてくれるよう頼んできた。七十歳あまりの私の祖父母はどうしても一緒に逃げる、という事で私達についてきた。逃げられない人たちはおいていくより

他は考へられなかつた。

みんなは私達が二十四日に逃げまわつた道を歩いていった。途中たんぽの中に入人が死んでいるのを見て親せきのおじいさんとも知らず、「かわいそうに、どこの兵隊だらう」と口にしながらその人の上をとびこえていた。しばらく行きずりの壕の中に身をひそめていると、何かしら聞いたことのない言葉が聞こえるので、アメリカ一がきたのではないか、とみんな心配していた。それでも長居は危険なのでできるだけ山奥の方へと歩いていった。

どれだけ歩いたんだろうか、やや安全と思われる場所に来た頃、二人のおばあさんがすわつていて一人は水のはいつた一升びんを持ってゐる。私は顔を見るなりみんなはどうしたのか聞いてみると、みんな死んでしまつて残つたのは自分たら二人だけであるという。水をもつたおばあさんは一人の娘を首を縄でくつて殺したため頭がおかしくなり、「もう少し娘が帰つてくるからはやくこの水を飲ませてやりたい。」と大切に腕にかかえてはなそとしない。私達と一緒にいた子供が水が欲しいからちょうどいい、というけど、もうすぐ娘が帰つてくるの一点ばかりでだれにも分け与えようとはしなかつた。

私達はみんなが死んでしまつたというのを聞き、これだけ十人くらい残つたつてしまふがいいから一緒に死んでしまおうという事になつた。すると二、三人子供を連れたおばあさんが、「私はこの子たちに手をかけることはできない。首をしめて死ぬよりは焼け野原にすわつていて米兵に殺されるのを待つていいよ」というのである。私はびっくりして、米兵につかまつたりでもしたら大変だ、といつた。

私達はみんなが死んでしまつたといつた。中には子供を殺してしまつたとぐつたりとなつてはいつてくる人もいた。

何日かたつとスピーカーで戦争が終わつたことを告げている。その声が部落の人の声なのでほとんどの人が日本が勝つたといつて喜んだものだつた。しかし出ていてみると、勝つたのがアメリカだと知つた時はくやしくてたまらなかつた。

自決から捕虜へ

座間味村字慶留間 大城昌子

その後、二、三日目ごろには一人集まり二人集まつてたくさんの人たちが私達のいる方へやつてきた。中には子供を殺してしまつたとぐつたりとなつてはいつてくる人もいた。

何日かたつとスピーカーで戦争が終わつたことを告げている。その声が部落の人の声なのでほとんどの人が日本が勝つたといつて喜んだものだつた。しかし出ていてみると、勝つたのがアメリカだと知つた時はくやしくてたまらなかつた。

うと、それでは生きられるだけは生きてみようという事になつた。そのためには一中隊の方に行つた方がいいという。ところが先程からいるおばさんの話では、みんな兵隊がいないのを知つて一中隊からもどつてきて死んだというのである。私達はそれを聞くと急に気がぬけて壕の中にすわりこんでしまつた。死ななければいけないとあせつていながらもどうしても死ねない。しかたなくそのまま壕にかくれてゐる事にした。

三日目に晩の大霖になり壕の中まで水びたしになつてしまつた。それでも出て行けず、じつとしているより他はなかつた。

しばらくすると、足音が聞こえてきたのでみんなは米兵が来たと思ふ声を殺していた。ところが子供の泣き声らしいものが聞こえるので、もしかすると私の叔母かも知れないと思ふ声で呼んでみた。すると返事があるので急いで壕の中に入れてやつた。おばは中にはいるなり、自分の弟だということを知らず「向こうに日本兵が死んでいた」と話している。しかし子供の方は自分の叔父が死んでいたのだといつてはつてゐる。

その頃からは全員何日も食事してないのがこたえて動く元気もない。

子供たちはおぶされているが首すらもたげることもできず、いつもうしろの方に頭をたれていた。

叔母の話では、一中隊の方にいたがお腹がすいているせいいか子供がなきだしたため、兵隊たちが、この子のためにみんなが見つかると迷惑だから、と壕を追いだしたので、しかたなく私達のいる方へプラプラしてやつてきたという事だつた。

ものでした。

十九年の十月十日の空襲の時は山が焼けただけで部落には何の被害もなかつたため、ほとんどの人が、戦争とは、ただ山が攻撃されるだけの事だと考えていました。

ところが、二十年の三月二十三日、朝早くから飛行機の爆音が続けざまに聞こえてくるため、部落民は異常を知り、山に逃げることにしました。その日から壕内の生活が始まつたわけです。

空襲では山のほとんどが焼かれ、部落は二、三世帯と豚舎などがこわされた程度で、これといった被害がなかつたため、部落民は二十六日の大惨事が起るまで、戦争の恐ろしさを知るよしもなかつたのでした。

三日間の空襲が続き二十六日の早朝になって部落民の一人が米軍の上陸を知らせてきました。それからというもの全員騒然となり、できるだけ山奥へ、家族をつれて逃げられるだけ逃げようと赤ん坊をおぶり、幼児の手をひき、山をはいざりながら、みんな懸命に走り出しました。ところが、部落といえはちっぽけな孤島であり、海上には米艦が十重、二十重になつて島を囲んでいたためどうしようもありません。米軍にたちむかうにしても部落に武器といえば竹やりしかなく、友軍の応援を頼むにしてもわざかばかりが裏海岸に駐屯しているだけで、あの大多数の米軍にたちむかっていつたつて勝てるはずがありません。部落民が最終手段として考えついた事は玉砕でした。

前々から、阿嘉島駐屯の野田隊長から、いざとなつた時には玉砕するよう命令があつたと聞いていましたが、その頃の部落民にその

を見ると非常にうらやましく、英雄以上の神々しさを覚えました。それに対して、敵につれていかれる我が身を考えると情なくて、りっぱに死んでいった人々の姿を見る度に自責にかられるため、しまいには、死人にしつとすら感じるようになり、見るのもいやになりました。

当時十九歳であった中村信子さんは、南洋のパラオ島から妹と二人帰つてきた直後空襲にあり、慶留間島にとじこめられる状態になりました。

玉砕の際、他の人々は家族で首をしめて殺しあつていて、妹と二人だけなので、首をしめるにも女の力では失敗するではないかという気持があつたため、ちょうど米軍機から爆弾が落とされ、近くの山が燃えていたので、その火の中とびこんでいました。ところがどういうわけかやけどを負つただけで「死」にまでは至りませんでした。一度失敗してしまつとその後二度と死ぬ気にはなれず、そのまま捕虜になつてしましました。

以上のような手段で部落民全員が「死」に挑んだわけですが、半数以上ともいわれる部落民が目的を達成し未いの人たちにいわゆる神々しさを見せつけたわけです。

木麻黄には多くの人々が顔を黒くしてぶら下がり、中には生後十八日目の赤ん坊が母親の下がつた隣の枝にぶらさがつていてる様子や、また、木の下では、首に絹が巻きつけられたままの赤ん坊がすでに死んでしまった母親のお乳をさかんに吸つてている様子などは、何とも表現のしやうのない痛ましい光景でした。

敵であるはずの米軍は自決者を助けようと奔走していました。親

ような事は関係ありません。ただ、家族が顔を見合させて早く死ななければ、とあせりの色を見せるだけで、考えることといえば、天皇陛下の事と死ぬ手段だけでした。命令なんものは問題ではなかったわけです。

米軍の上陸後二時間程経った午後十時頃、追いつめられ一か所に集まつた部落民は、家族単位で玉砕が決行されました。数時間前までだれ一人として想像もできなかつた事が、わずかの時間でやつてのけられたのです。

当時、五十七歳で農業を営んでいた中村慶次さんは、妻子を連れて逃げられるだけ逃げようと思つたようですが、もう行く所もないということで壕にひきかえし、持つていた縄で最初に五十四歳の奥さんの首をしめ、次に二十八歳の娘さんの首を強くしめました。そしてそれその死を確認したあと、自分の首を無我夢中でしめている所を米兵に見つかり、未すいに終わつて捕虜となりました。その時のくやしさは何といつていいかわからないと言つています。

私は父（兼城三良）と一緒にお互の首をしめあつてゐる時に米軍に見つかり、中村さんと同様、捕虜となつてしましました。これまでどんなつらい事があつても、自分のすべてが天皇陛下のものであるという心の支えが、自決未いのため、さらには捕虜になつたため一度にくずれてしまい、天皇陛下への申し分けなさでどうすればいいのか全くわからず、最後の「忠誠」である「死」までうばつてしまつた米軍がにくらしくて、力があるのなら、そして武器があるのならその場で殺してやりたい気持ちでいっぱいでした。

米軍にひきいられながら、道々、木にぶらさがつて死んでいる人

だけが死んでしまつてとり残された子供が泣きつかれて眠つてゐるのを見ると、服を見つけてきて静かにかぶせてやつたり、死にまねをしている人たちや息絶えだえになつてゐる人たちにも手をかけ、親切に介抱してしまつた。また捕虜となつた部落民にもとでも親切で、どこへ行くにもついてくれました。

慶留間島に上陸した米軍は約五日間山に陣どつて、渡嘉敷島や座間味島、それに阿嘉島に向かんに大砲をうち続けていました。慶留間の部落民がすべて捕虜となり山からおりてきつた後、米軍は伊江島の人々約四〇〇人を連れてきていたため、一か年近く各家庭に分宿し、部落民と生活を共にすることになりました。その頃からは作物は十分あるし、米軍からの配給物資もあつたため、多数の伊江島の人たちがやつてきても何不自由することもありませんでした。さらに海から貝をひろつてくると米軍はそれを買ってくれば、お菓子などと交換もしてくれました。

やつと二十三日の空襲以前のように再び自由になることができ、伊江島、阿嘉島の人々を交じえた部落民の家族同様の生活が始まりましたが、数日前まで行動を共にした家族や友達と二度と語り合うことができないという事を考えると、そして天皇陛下に對して忠誠を全うできなかつたという事を考えると、こうして生きていることが苦痛に感じられるのも、一人、二人ではありませんでした。

集団自決

昭和二十年三月二十三日から空襲が始まったため、いつもの空襲

とかわらないだらうと思い、近くの壕に逃げたが、二十四日頃からあまりにもはげしく、ただ事ではないと思い、島の裏側に逃げていきました。ところが、海の方を見ると、数えられないくらいまつ黒な航空母艦が、すらっとならんでいる。さらには弾も頭の上を飛んでくるため危険を感じ、ウンジャ河原の方に逃げていきました。

その時から家族は離ればなれになってしまい、父と子供三人はそのままウンジャ河原に行つたが、娘は別の道を行つてしましました。

砲射撃もはげしく不安ではあつたが、部落民と一緒だ、という強みがありました。

ところが、二十六日の早朝、見はりをしていた中学生がアメリカ

人が上陸してきた事を知らせてきました。その時、私達は前もつて上陸の場合は、全員竹やりを持って戦え、ということを教えられていたため、そうするつもりでいました。しかし上陸してきた米兵を見た時、立ちむかうというより、すぐ死ぬ事を考えました。一緒にいた部落民は、父親が妻や子の首をしめたり、夢中になつて木にぶら下がるもの、ねこいらづをうばいあって、なめて苦しむ者、表現できないほど残酷な事がやってのけられていきました。

私達も死ぬ方法を考えた結果、首をくくるに限ると思い細をさがしている所へ米兵がやってきてつかまつてしましました。山をおりて行きながら道々に死人が横たわつてしたり、顔をまつ黒にして舌を出し木にぶら下がつている人を見ると、私達より先に死んだという、しつとの氣持でうらめしくすら思いました。しかし

今から考えると申し分けない気持ちでいっぱいである。

山をおりてからは部落民全員一か所に集められ、米軍が食糧をはこんでいたが、一ヶ月余もすると、伊江島の人たちも一緒に部落に帰され、従来通りの生活にもどりました。

あの頃、伊江島の人たちがいなければ、私達は毎日、びくびくしていたに違いないと思う。集団自決で過半数の部落民が死んでしまつて残されたわずかの人々だけで何ができるだらうか。

座間味島の戦闘

座間味村字座間味 宮 里 と め

十九年の十月十日の空襲以前は、本土から来た兵隊さん達を中心と陣地構築が行なわれていました。それを見ると、戦争か、と思う気持ちはありました。ふだん私達一般農民は戦争とも思えないような雰囲気の中でせつせと野良仕事にはげみ、のんびりと生活を送っていました。また私の家族も、そのようなんびりムードの中で分宿割り当てされた兵隊さんたちと、家族の事や出身地の事を語らひながら、楽しい日々を過ごしていました。

最初の空襲の日、つまり十月十日は、私は風邪をひいて床についていたため、私の代わりに母が屋嘉比島（無人島）の畑を耕やしに行き、家には私と子供三人が残っていました。

午前十時頃、爆音が聞こえてきたか、と思うと同時に突然、はげしい機関銃の音が聞こえたため、「そろそろ、演習も本格化してき

たな」とばかり思つていました。ところが、近所の人たちが、「駆潜艇（沖縄本島から避難してきた海軍艇）から負傷者がたくさん運ばれてきたよ」と大きわざしているのが聞こえます。その時はじめて空襲を信じ、大急ぎでふとん一枚をかかえ子供三人を連れて防空壕へ向かいました。その頃、ちょうど稲の穂が実つていたため、壕に行く途中、田んぼの中にはいついて稲の間にかくれながらやつと目的の壕へたどりつくことができました。食糧はソテツと芋のおじやをもつていきましたが、不安のあまり食事をする気にもなりません。一晩は壕の中で過ごし、翌朝、何事もなきさうなので帰ることにしました。壕を出でみるとそんなに被害はなく、周囲の山があつちこち焼けているだけで部落には大した被害がないため、戦争とは大体そのようなものだらうと楽観していました。

翌三十年の三月二十二日、一人の兵隊さんから、「あしたの情報は悪い氣がするから、子供たちはなるべく早目に避難させなさい」と言われました。しかし突然の事なのですぐ避難というわけにはまいりません。やはり翌日まで待つことにして、子供たちが学校から帰り次第連れて行くことにしました。幸いにも翌二十三日は、二十四日の卒業式の準備があつて子供たちは午前中で学校から戻つてきました。私は顔を見るなり、「きょうは情報が悪いから早目に壕に行きなさい」と追いたてるようないつた矢先、ものすごい爆音が聞こえきました。そのあとはもう夢中で子供たちをひきすりながら、いちもくさんに壕へ向け走つて行きました。

私の家族には小学校五年生の甥も加わつて行きましたが、彼は私達と一緒にいました。しかし突然の事なのですぐ避難というわけにはまいりません。やはり翌日まで待つことにして、子供たちが学校から帰り次第連れて行くことにしました。幸いにも翌二十三日は、二十四日の卒業式の準備があつて子供たちは午前中で学校から戻つてきました。私は顔を見るなり、「きょうは情報が悪いから早目に壕に行きなさい」と追いたてるようないつた矢先、ものすごい爆音が聞こえました。そのあとはもう夢中で子供たちをひきすりながら、いちもくさんに壕へ向け走つて行きました。

私は壕に着いた頃からは、攻撃が本格化し、グラマンからは曳火弾がたて続けに放たれてきました。それが夕方まで続き、一機一機引き揚げて行った後、朝をさがしにいそいで壕をとひだして行きが運命の別れ目になるのも知らずに……。

私達が壕に着いた頃からは、攻撃が本格化し、グラマンからは曳火弾がたて続けに放たれてきました。それが夕方まで続き、一機一機引き揚げて行った後、朝をさがしにいそいで壕をとひだして行きました。だれかが家まで連んできたらしく、横たえられていました。だれかが家まで連んできたらしく、横たえられていました。彼の避難していた壕は多くの家族が入つていたらしいのですが、村ではじめての犠牲となり、一人重傷を負いながらも生き残った婦人以外は全員爆風で死んでしまいました。後で知った事ですが、生き残った婦人は甥のすぐうしるにいたらしく、彼の横腹を貫ぬいた弾がその婦人にも影響したため、死までは至らなかつたそうです。

二、三日壕で暮らしたと思います。どこにも行けず、もう生きることは考えられません。弾が飛んで行つたびに、あの弾にあたるのか、この弾にあたるのか、そしてどんな苦しい思いで死んでいくのか、ただそれだけを気がかりにしていました。

私達が避難している場所から部落の方は全く見ることができないため、父が畑の方まで行つて部落の様子を伺つてきました。「さままな人がいるけど何事だらうか」とふしげがつっていました。その頃、米兵が上陸しているとは、知るよしもなかつたのです。激しい攻撃で大砲が田んぼの中に落ちると泥がとび散り大きな穴があいたと思うと、急にあぜ道がなくなつたりしました。兵隊さんたちは若さのためか、びくびくしている私達とは反対に弾が落ちる

のを見て喜んでいました。その頃からは、兵隊さん達に対して、腹立たしささえおぼえられました。

夜になると山の方は真赤に燃え上がり、不安は一層たかまつきましたが、相変わらずのんきにかまえている兵隊さんたちを見ていた、「山火事すら消しに行けないのか」と情けなくなり、もう、兵隊さん達には、まさせられないな、と一人、腹の底で考えていました。その時、二人の男の人が、毛布を腕にかかえ、蒼ざめた顔で壕にはいってきて、「島は敵に包囲された。上陸もしている」と思せきりて言うので、私の家族は驅逐となりました。

二人の話によると、米軍の上陸を知つてから自分たちのいる壕は何か危ないような気がしたため他の場所に移ろうと、せっかく壕を出てきたのに忘れものをしたらしく、再び壕に戻る途中、私達がそこら辺にいることを知つて知らせに来たということです。

彼らは、一応私達に話しあふると、再び壕の方に行ってみると毛布を置かせ、そして彼らが出かける前に、「忘れ物をとつてきてまたここに来なさい。無事戻れたら、一緒に阿佐部落の方へ避難しましょう」と話を決めてから二人を行かせました。そして私達は二人が帰るとすぐ壕を出られるように準備をして待つことにしました。

ところが何時間待つても、二人は一向に帰つてくる様子があまりません。待てど待てどその気配がないので、我が身の安全を考えました。

さめきつてない釜を妹が頭にのせ、それぞれ持てるだけの荷物を持って内川山から番所を通り、阿佐部落へと再出発しました。

山はほとんどが焼きつくされ、とても歩きやすい状態になっていました。

番所にさしかかった際、一人の兵隊さんに会つたため、私達は、阿佐部落へ逃げる途中だ、という事を話すと、

「そこは米兵がたくさん上陸しているので下の方に逃げなさい」と言つたのです。しようがないので、途中からまた下の方に方向をかえました。

中腹あたりまで下りてくると、先程忘れ物をしたから、と取りに行つたきり戻つてこなかつたうちの一人が、女物の服を着て松の木の下にすわっているのです。月夜のため、すぐ彼だということがわかりました。彼の話によると、二人は壕に行く途中、米兵を見つかって発砲され、一人がふりむいたとたん、上くちひるに弾があたつたため、彼はそれを介抱しようとして立ち止まつた所を、二人共、敵につかまつたらしいのです。米兵は二人をつかまえると、どこへ連れてい行くつもりなのかずつとひきずつて歩き出し、途中、休んだ場所が偶然にも、彼の家族が避難している壕のすぐ入口付近であつたわけです。彼は、急に家族に会いたくなつたと同時に、腹の具合がおかしいので、用足しという理由で米兵一人に見張られながら暗がりを求めて、やつと米兵の元をはなることができ、そしてスキをみて少しケガした足をひきずりながら一生けん命逃げて來た、という事でした。

彼を含めた私の家族は、再び、安全な場所を求めて歩き続けました。

て先に出発することにしました。

八歳の長男を母がおぶり、私は次男をあさ絆でおぶつて十歳の長女の手をひきながら阿佐部落へ向け出発しました。

私達は、前々から阿佐部落への避難を予想していたため、万が一の事を考へて途中の道端に食糧をかくしていました。それを取ろうと立ち寄つた所、ちょうど食糧をかくしている場所に二人の米兵が立つてゐるのです。もう食糧どころではありません。いかに、気付かれないと逃げられるか、それだけを気にしながら冷や汗をかきつつ、やつとその場を逃れることができました。

あたりはすっかり暗くなつていて、まだ安心はできないので、休みなしにずっと歩き続けていると、突然、暗がりの中をゆつくり弾が飛んでいくので、私はすぐ、友軍だ、と察することができました。これまで、米兵の激しい機関銃の音ばかり耳にしてきたせいか、ゆっくり飛んでいくのは友軍の弾しかない、と直感したわけです。それを知つたせいもあってか、これまで振りつめていた気持ちが少し柔らいできたため、私はみんなの食糧をさがしに行くことにしました。

小川に沿つて歩いていると釜を見つけました。さらに運のいいことに、手前の壕に米びつが置いてあり、中にはお米がいっぱいはついています。

釜に炊けるだけのお米を洗い、大急ぎで炊いてからみんなが待つてゐる場所に戻つてきました。しかし、食糧を手にしても、いつ何時、危険がやってくるか知れないのです、すぐにはいただけません。早くどこか安全な場所を見つけなければいけないので、まだ完全に

た。

座間味村で最も恐ろしい底なしの洞穴、通称「アブの穴」にさしかかったころは、海の方には敵艦が、私達が立つてゐる場所の石ころさへはつきり見ることができるくらいに電燈を脣みたいに照らして、船から船へ渡れるのではないかと思うほど無数に島をとりまいていました。

軍艦ばかりを氣にしていたせいで「アブの穴」の事を忘れていた私達は、誤まって、娘をその中に落としてしまいました。それからといふもの、大きわぎをしてどうすればいいのか考えられません。急いで父が手を入れてさぐるのですが、何の反応もなさうです。ただ、泣声だけが洞穴の中から響いて聞こえてくるだけです。今度は、足を洞穴の中におろしてみると、少し長女の体にさわるらしく、麻縄をおろしてやつとひきあげることができました。娘をひきあげた後何かの拍子に水筒が洞穴の中にころげ落ちたため、「コロン、コロン」といつまでも続く音で改めてみんなの言う、「底なし」を感じさせられました。

いつまでも同じ場所でもたもたしているといつ何時米兵に發見されるかわからないのでさらに安全な場所を求めて歩き続けました。絶壁のふちを歩いたり、とげのある木の間を服を破られながらも歩いているが、避難するのに絶好の場所をやつと見つけることができました。その場所に着いてからはみんな安心した表情になり、「ここだとみんなの遺骨が散らばることはないし、死に場所にしようとだからともなく言い出しました。そして、持つてきた食事をお

にぎりにして、みんなで腹いっぱい食べました。水の方は、ちょうど
ど雨が降り出していたため、しばらく不自由することはありません
でしたが、雨がやんてしまつた後は、とても困りました。さらに、
そのような中に、どこからか一人のおばあさんがはいつてきました
が、とうてい歓迎できたものではありません。

た砂糖を出して与えました。これで落ち着くかと思った所で、今度は水を要求する始末です。ところが都合いいことに、後かららいつてきたおばあさんがそこらへんの地理に詳しく、水のあり場所を知

かし、水をみつけることができても、戸の間はやはり危険を伴なうため、夜、二、三回出かける程度でした。

翌朝、人の足音に目をさましたため、びっくりしてとび起き、恐る恐る外の方をのぞいてみると何と私の家に宿泊されている兵隊さんが立っているのです。なつかしさがこみあげてきたのですが名前を呼ぶと、彼も私の顔を見るなり、「お元気だったんですね」

「お元気だ、たへやね」と喜んで話しかけてきまし

きれいな水がないため、オシメを洗つたり、豚や山羊をつぶした後洗つたりする汚れた水でさえ、早めに汲まなければすぐなくなってしまうので、戦争のみにケンカをしました。夜になると、それお米を入れた釜を持ち出し、お米を洗うと水がもつたいないので、洗うごともなしに適当な水を入れ、カマドを作つてごはんを炊きました。ところが、万が一、ごはんを炊きながら薪が足りなさそうになるものなら、捨いに行つて帰つてくるまでには、もう釜がなくなつていました。それでどの家族も、必ず二人がかりでごはんを炊きにきていました。

そこに来て二、三日経つたある晩のこと、人の畑にこっそり行つて近くにかくされている鍬をとり出して一生懸命、芋を掘つていました。しばらく掘つてから鍬を置き、掘つただけの芋を一方によせてから再び掘り出そうとした所、そばに置いていたはずの鍬がありません。「確かに置いたんだけど」とあたりを調べてみると、暗がりの中で兵隊さんらしい人が私の鍬（實際は人様のもの）を使ってさかんに芋を掘つているのです。私は無断で兵隊さんが持ち出していったのに対して腹を立て、相手がだれであろうとかまわないといふ気持ちでたついていました。すると、「何、お前たちだけ生きていればいいのか、俺たち兵隊は死んでもいいのか」

「兵隊だと言うけど、島を守りに来て山火事すら消すこともできな
いくせに、生きる、死ぬはこっちの知ったことではないよ。あなた
方は自分一人生きることができればそれでいいはずだけど、私は親

「座間味部落の人たちなら、ほとんどが阿佐部落の裏海岸に避難しているよ。」
と言うのです。それを聞いた後、少し心休まる思いをしましたが、どうして今までだまっていたのか、教えてもらつてありがたいと思ふ氣持ちより、恨めしい氣持ちでいっぱいでした。
住民が大勢生きていると聞いて心は勇み、さっそくその場へ向け出発しました。

目的地の近くまで来た時、部落の人に会い、子供たちにと、おにぎりをもらいました。その人は、友軍が置いていったものをもらつて来た、とたくさんのお米をかついでいました。それを聞いて、私達も取つてこよう、と教えてもらつた場所に行つてみると、なるほど、川の水をせきとめるくらいにたくさんの米俵が川の中に積まれてあるのです。近くには兵隊さんが死んでいるため、それを見ると死ぬのがいやになりました。

持てるだけの米を持ってみんなのいる場所に着くと、もう、なつかしさと心強さとで、これまでの疲れが一度に消えてしまいそうでした。

ところが、大せいの中で生活してみると、これまででは家族だけで苦しくても助け合いながらやつてきましたが、他人となると、自分たちに不都合になるのであれば、助け合いの気持ちなんて少しもありません。むしろ、敵視してしまうようになつてきました。

や子供にも食事を与えなければいけない。だから私が芋を持つて帰らなければ何もないんだよ。そうなったのもみんなあなた方が島を守りきれなかつたせいなんだよ」

「と言つてやりました。すると、一人の兵隊さんが私の声を聞いて、「もしかしたら下宿のおばさんと違いますか」と言うので、よくよく見ると、伺と、私の家に泊まつてゐる班長さんなのです。これまでケンカごしに話をしてきたため、はずかしくなつて黙つてゐると、班長さんが、

「ほんとにスマセんね。食べ物の事となるとお互い戦争になってしまって……。ところで子供さんたちはみんな無事ですか」

と聞くので私も黙っているわけにはいかず、「おかげ様でみんな元気ですが私が食糧をさがして持つて行かなけば食べるののがなくて餓死するかも知れません。まだ死ぬ気にはなれませんから」と言いました。それを聞くと、兵隊さんたちは、「じゃ、これは私たちが掘った分ですからみんな持つていって子供たちや御両親に食べさせて下さい」とたくさん芋をさしあしました。突然の事でびっくりしてしまって、何をどう話せばいいかわからないので、ただ頭を深々と下げ、お礼とおわびを言って、全部もらっていくことにしました。

夜は寝る暇もなく、かようにして食糧集めに懸命になつていまし
たが、夜だけでは十分とはいえないで、ある日、昼間から食糧さ
がしに出かけました。ところが運悪く将校さんに会つたため、
「おばさん、どんなにあせつて食糧さがしに出かけても、もし敵に

見られて殺された場合何の意味もなさないんですよ。子供たちを逆に餓死させることになるんですよ。そんなに食糧が欲しければ私達の食糧から少し分けて持つていきなさい。でも、食糧が欲しいのはおばさん一人ではないですからね」

と言わされたので、私は、「すみません。母が一人で烟を行っているのはどうしても迎えに行かなければいけないのです」

と言いました。すると将校さんは、

「米はないのですか」

と聞くので、私は少しのこつていることを思い出しましたが、しかし「全くない」と答えると、しようがない、という事で食糧さがしを許してくれました。私はお礼を言ってさとその場を離れ、何も恐れない態度を見せながら歩いて行こうとしましたが、将校さんに言われるまでもなく、実際、内心では、敵に発見されて殺されてしまわないか、ひくびくしていました。

その後、再び将校さんに見つかることまずいので、革をあきらめて今度は、潮が干くのを待って貝をとることにしました。どういうわけか、米兵の事より、友軍に見つかったら叱られる、という事だけが気になり、敵の事は、さほど気にならなかったのです。それがたたたせいか、貝を拾った後、一人の婦人と一緒に水汲みをしていると、突然、カメのような船（海も陸も走れる船）が私たちをつかまえるためにやってきました。二人はびっくりして、ガケつぶちに沿って逃げようと走りましたが、やはり機械には勝てません。ガケの上へはい上がるうにも絶壁になっていて、女の力では登れませ

ん。どうしようかと迷っている時、今度は、上からも敵がやつてきました。さらに、四方八方から私たちを取りまくように大せいの米兵が集まつて、もうどうしようもありません。一緒にいた婦人が、「どうせつかまつてしまふのだから、手を上げて降参しよう。」

といふので、手を上げて自分から米兵の方に進んで行きました。

その時の気持ちといえば、みじめさと情けなさで、憤りをどこにぶつけていいものかわかりませんでした。ただ、自分に対しても何かがあったことは否めません。

私たちが米兵につかまつて船の方に行つた時には、部落の人達はずいぶんつかまつっていました。私は一人だけつかまつていくと、後に残つた両親や子供たちがどうなるか、とても不安だったでの、通訳している方に、

「私は子供たちや両親を残してきてるので、連れに行かせて下さい」とお願いすると、その人は、「あなたの家族をふくめて何人くらいいるのか」とたずねてきました。私は一〇〇人くらいだと答えると、二〇人くらいの米兵を従えて、全員連れて来なさい、と言われました。言われるままに、みんなのいる壕の方へ行つて入口に立ち、「出てこないとみんな殺されるから、早く出てきてちょうだい」

と大声を出すと、わりと素直に、ぞろぞろ出てきました。米兵は、体の動かない年寄り達に對しては、板でつくつたタンカでもつて一生けん命、運び出していました。

二十五日の晩、全員自決するから忠魂碑前に集まるよう連絡を

受けたため、一番いい服を取り出しきれいに身仕度を整えてから、子供たちの手をひきながら忠魂碑に向かいました。ところが途中まで行つた時、照明弾がさかんに落とされ、激しい艦砲射撃に見舞われました。今まで「死」が私達の心を支配していましたが、どうしたわけか、本能的に近くの防空壕に飛びこんで行きました。この調子では、死にたくても満足して死ねないということになり、自分たちの壕にニコチンを置いてあるのを思い出してもなんひき返していきました。ところが、確かに置いていたはずのニコチンがなくなっています。母は、自分たちだけ死んでしまつては子供たちが可愛いそうだ、どうにかして一緒に死ぬ方法はないのか、と連発していました。

すると、近くにいた兵隊さんが、

「こんなに小さな島に米兵が上陸すると、どんなに逃げても袋のねずみとかわからないし、どうせいつかはみんな死んでしまうもんだよ」といました。それを聞くと、前に友軍から、もし米兵が上陸してきたら、この剣で敵の首を斬つてから死ぬように、ともうつた剣を知り合いの男の人に、敵の首を斬るのは男がしかできないから、と上げてしまつたのを非常に後悔してなりませんでした。

座間味の集団自決

座間味村字座間味 宮里 美恵子

十九年の九月も半ば、兵隊さんたちの分宿配当に私の家へも役所

から藏田さんや荒木さんら八人の将校さんたちの民宿の依頼があつたため、生活を共にすることになりました。その日から私達は家族同様に、お互い何でもうちあけて話し合う程の親しみで接していました。十歳を先頭に私の子供三人も、いつも「将校さん、将校さん」となついていて、食事時間には食ぜんを手伝い、「おかわり」と言えば、急いでおわんを取つてきて、「お母さん、はいおかわり」と三人交代で運ぶなどしていました。

将校さんたちは、自分たちに与えられた白米のごはんは食べずにいつも私達が食べている玄米を召し上がっていました。「出かける時、『いつでまいります』のあいさとにおばさんが『いつでらっしゃい』と言つて、『ただいま』と言えば『お帰りなさい』の声がかかる時、ほんとに我が家のおふくろさんみたいだ」と言つてくれる時もありました。

将校さんたちが突貫隊を連れて夜おそくから演習に行く時は、私は帰つてくるまでお風呂をわかつて待つていました。

お正月には、将校さん達は私の提供した豚一頭をつぶし、トンカツやあらゆるごちそうを作り、私の家族を含めてテーブルいっぱいひろげたごちそうに手をつけながら、戦争中とも思えないようなふんいきで楽しいお正月をすごしました。そして私は、みんなを仏さんの前にすわらせ、「勝ちいくさになるよう！」と合掌させたこともあります。